に於て最も有意義であり、更に自己を主張し、自己を強く生きんとする事になる。然して又自己に對して最も強く責任を感ずる人間を作る事になる。

正しい主張、正しい社會の狀態、人々が等しく一樣に惠まるゝ至公至平の世の中を作ることは、人間として最も幸福な事である。子供は生れ乍らにして正義を愛し、公平を望むものである。子供の考を曲げる事なく順當にのばして行けば、必然に合理的な社會は實現する。今の教育は餘りに多く子供に虛僞を敎へ、欺瞞を示してゐる。そのために敎師が正しい生活を試みる事が何よりの急務である。

□ 殼を破れ

一

K君。社會革命が果して來るだらうか。我日本の社會の現狀に對しては何人も多少の不平と不滿とを有つてゐる。よしやそれがブルのブルなるものと雖も、彼等には彼等相應の不滿な處があるに違ひない。卽ち近頃のやうにプロレタリアがわいわい云ふ事その事は、彼等にとつてはまさしく不安の種子であるに相違ない。

現存社會のあらゆる人々が等しく平安な生命の生長發展を希求してるが、そのやうな社會の狀態が、果して形作られうるだらうか、吾等はその理想的な狀態を凡て胸に描く事は出來る。然しそれが果して可能なりやに就ては尙若干の疑問を殘してゐる。

然し乍ら、すべての人々が不安であり、落ちついてゐない以上、そこに何等かの革

新が行はれ、やがて安定であり、平和であるべき日が近づくであらうまでには、そこに様々な營爲がなさるべき事は勿論であると信ずる。

ある人は――恐らく知識階級に屬する尤も多くの人は、此後の社會の革新を只管教育に期待してゐる。彼等は既に科學にも宗教にも藝術にも、さうしたもののすべてに匙を投げすてた。殘るものは只だ教育ばかりだと考へてゐる。只だ教育の力によつて、この不合理な社會この不安な社會を革新して行かうと、それを唯一のたのしみとしてゐるのだ。

それだけにわが教育家諸君の、彼等に期待せらるゝ處は頗る大なるものがある。彼等は眞に教育者の力によつて、そこに美しい社會の出現することを、專らあこがれてゐる。云はゞ我が教育こそは、新時代の唯一の望の綱であるのだ。

K君。然るにわが教育家諸君は、この彼等――多くの文化人の期待を裏ぎらないだらうか。君自身が教育家なる一人として徐ろに考へてみてほしいのだ。僕は今君を以て教育界を代表するものと考へて、こゝに我が思ふところを、思ふ存分に云つてみたいのだ。

二

K君、教育界の新人を以て任ずる君には、現代社會に對する不平不滿があるかないか。恐らくこれは餘りに突飛な問かも知れないのだが、僕が知つてゐる教育者の中には、今日の社會の何が、何處が、その如何なる點が不合理であるかよく意識してゐない人が多いのだ。是等の人々によつて恐らく何の革新、何の創業が出來やうぞ。

『何事もあるがまゝでいゝ』と觀念する僕自身すら、自分自身の事に對しては何等の不平不滿もないのだが、社會人の實狀をみるとそこに幾多の横暴戾虐がころがつてゐて思はず面をそむけ、憤慨の言葉を發せざるを得ないのだ。

試みに、まづ君等の左右を顧みたまへ、いかにいまはしい力が諸君の頭を抑壓して

ゐる事であるか。校内にあつては同僚先輩の猜忌嫉妬にみてる不快なあの眼をみよ。陰險で只管に自己の地位をおそれ、部下の生長をおどおどとおぢけてゐるあの校長と云ふものゝ眼を見よ。足一度校外に出れば所謂有志家と稱する横暴にして無知無能なる田舍ブルジョアの醜狀をみよ。只管にお上の命これ恐れてゐる視學や郡長のやり口を見よ。それらのいろいろなものが二重三重に重りかさなり合つてわが教育家の頭上にのしかゝつて來る。あの重くるしい、むしむししした不快さはあれは一體何だ。君はもうあの空氣になれきつて了つたのか、やがて又自らが姑になつて若い嫁をいぢめ返してやらうと云ふのか、おういやだ〳〵。

K君、君方の社會にも餘りに多くの生命の虐殺を發見する。兒童は教師のために、教師は同僚とマスターとに、そして亦あらゆる社會人のために、君方は徒なる生命力の消費と、虐殺の裡にあへぎあへぎしてゐるのではないか。

二三氣骨の高い、鼻柱の強い革命家がそこに表はれて、その不合理と不正義とを憤慨して立つたと云ふ事實は、たまにきかぬでもないが、要するにそれらは飛んで火に入る夏の蟲として冷笑され、默殺されて了ふではないか。かくて永久に教員の意氣は上るまいと思はれてゐるのだ。

三

K君、表に出で男らしく戰ふ事の出來ぬ弱者は、常に陰に廻つてこそこそと惡い事をする。同僚の排擠、兒童への偏頗なる處置、贈り物の强要、不義、姦通、野合、或るものは下宿の女をひつかける。女教師と共鳴する。校費をごまかす。上司に媚びる。教へ子をだましてよからぬ事をする。かう云ふ事は二十萬教育者の中の或は二十萬分のXだ。そしてそのXは極めて小なる事を信ずる。然し乍らこれらの不正不當の事に對して彼等の教育界はいかなる態度をとりつゝあるか、それが問題だ。無茶苦茶に攻擊批難した處で仕樣はない。かくの如き事のよつて來る根本因由に就て君等は更に深

刻なる考察を加へてみたのであるか。

K君、近時デモクラチックな風潮が田舎の隅々まで行き渡りあまつさへ教員不足の難にあふたため、地方の教育界は非常なる加速度を以て墮落して來たのであると云ふ事を、僕は度々耳にしてゐる。校長や視學等の口からきく嘆聲の一として、『どうもこの頃は教員の鼻息が荒くて仕末に了へない』と云ふ事をきく。それがいゝ意味に於てさうなつてくれば誠に占めたものだが、その風潮に乘じてコソ〳〵惡い事をするので困ると云ふのだ。サボル事が第一、不まじめが第二、シヤレル事が第三、そしてだれもかれもが本氣で教育などやらうともしないと云ふ。何か好い口はないかとアクアクして物ほしさうにそこいらに流し目を使つてると云ふではないか、恐らくこれは過分な貶詞だと思ふが、自身教育界にある人がかく云ふのを見ると誠に情ない次第だ。

そこでだ。そこで先に教育家に望を囑してゐた多くの文化人は、教育界のこの現狀をきゝ、見、一驚も二驚も喫した。殆んど絶望に近い悲みを發してゐるのだ。然し僕は君方のやうな眞個の教育者のある事を心強く思つてゐるのではあるが……

K君、教育者は弱い者だと云ふ。果してさうなのか、思ふに二十萬人にも達する知識階級の一團が、どこに外の社會にあるか。この二十萬人と云ふ一團の力――たとへ一人の力は微少であらうと、これが一團となつたと考へてみたまへ。その力は恐らく何物にも劣るまいではないか。百人や二百人の失業者を養つて行く位何の事はないではないか。その力が實に君等の上にめぐまれてゐるではないか。だが然し、教育者の大同團結は茲に久しく叫ばれてゐながら、一も物になつてゐない。然しなるべき時期は刻一刻に近づきつゝあるのだ。

これまで教育者を相手にある事をやらうとした人々の多くは、大抵之に愛憎をつかしてゐる。彼等は教育者はだめだと云ふ。教育者の多くは最後のドタン場にきてふらふら腰になり軟化して了ふさうだ。これはほとんうな事であつたかも知れない。踏み張る力がなかつたのだ。少し強い力――殊に官權の力がうごけば苦もなく押しつぶさ

れたものだ。それが當り前のやうになつた。飼ひならされた小羊は永久に眠らされてゐるのだ。

これは抑の大元たる師範學校――殊に高等師範學校の罪の中でその尤も大なるものゝ一つとして數ふべきものだ。去勢術に巧みな師範教育の禍が、今では國家社會の一大進運の前に横つて見にくい姿をさらげ出し、思ふ存分にその弊を逞しくしてゐる。これを打破るのは師範系統の學校を根こそぎに廢止する外はない。教育界の一大革命はそこにも見らるべきだ。がそれが果して可能か?どうか?。

四

K君。教育革命はこれまで度々叫ばれた。然しそれは教授の方法手段等に關する問題としてであつた。然しそれではもうおそい。教育が人の問題である事はもう何人も信じきつてゐる。

K君、あの恐ろしい話を君も記憶してゐるだらう。ソビエットロシヤが、成功した時にまづ第一に虐殺したのは小學教員であつたと云ふではないか。僕等はそれをきいた時にぎよつとしたな。血祭のイの一番に上げられる小學教員――彼等に何の罪があつたか。ソビエットは彼等の灰色を恐れたのだ。赤でもない白でもないのが一番癪だつたのだ。男らしく敵なら敵になれば、まだいゝ。始終キョロ〳〵して洞が峠からのぞいてゐる連中こそ全く仕末に惡いと云ふのだつた。K君、この事は大に今の教育家が味ふべき事實じやないか。

僕は日本に××××の來るべきを信ずる事は出來ない。革命の慘虐な血なまぐさい狀態を想像する事は全く僕のやうなものにとつては堪へられぬ事だ。然し徐々に我が社會は革新さるべきを信じ且つ之を希念して止まない。慘虐なくして將來さるべき革新、これは必ず諸君の手によつて行はるべきを思ふのだ、故にだ、故に僕は君に云ふのだ。まづ眼を開け。教授法の研究もいゝ。教育思潮の研究もいゝ。然しものと根本

をみよ。時代の底を流るゝものをみよ。そしてそれをつかめよ。正しくつかめよ。強くつかめよ。そして男らしく旗色を鮮明にして常に戰鬪的の態度であれと云ふのだ。これは何も同僚や上司と二六時中喧嘩腰で居れと云ふ意味ではない。正義に味方し、合理的な活動をせよと強調するのみだ。K君まだ〳〵云ひたいが、僕の指先がこの頃、痙攣する。今日はこれで失敬する。亂暴で意味をつくさぬのを殘念に思ふのだ。僕は讀み返してみる事は嫌だからこのまゝ君に打ちかけやう。

封筒に納めようとしてふつと又氣がゝりな事を思ひ出したので、少し書きたすことにする。これからの教育家は何を目ざしてすゝむべきかと云ふ問題である。それは僕の考では、あらゆる殼を脱ぎすてた人間としての自覺へといふことだ、教育だとか、閥だとか、因習だとか考へてみればいろいろなしがらみが吾々の周圍に膠着して、固いカラを作つて了つてゐる。この型は日に日に強くへばりつかうとしてゐる。この型を脱することは實に容易なことではない。然しこの殼を打破しなければ、吾々はほんとうな人間として息吹をふき返すことが出來ない、これはなか〳〵容易なことではあるまいが吾々は目標をそこにおきたい。子供のやうな純眞な心になつて出なほす事だな。

第九　奪ひ且つ與ふるもの

——愛と教育との問題——

一

彼は、さまざまの事象をながめ、察してその多くが悉く自己生命の生長に出發し、寄與するものであると見て來た。すべては彼が生命の限りなき伸展のために、向上のために、充實のためにとながめて來た。そして彼の考が今、愛の問題に逢着したのである。

愛すること、人を愛すること、彼はその意味をも、等しく自己生命の生長によりて解かうとするものである。彼は彼の生命生長を外にして愛は存在しないものとするのである。

二

彼は一日の疲れを、汗にぐつたりとなつた襯衣と共にぬぎすてると、その身邊に群る三人の幼兒にまづ一瞥を與へるを常とする。甲の頭を撫で、乙をかゝえ上げ、丙の頬にキッスしたい慾求に驅らるゝ。あるは小さきものゝお尻をまくりて、その軟かい肉を叩くことの、彼自身にとつて云はうやうなき快さを與ふるものなる事を直覺する。抱きあげられて嬉喜する子供に、己れの頬をすりつけて、自らも亦一日の勞苦を忘るゝ思がする。

この月並な茶番事が、彼がその幼兒たちに對する愛の發露の一つである。この他愛もない行爲、それは彼の内にひそむある本能の力が、彼をつき動かしてかくさせるのである。彼はかくせざるを得ぬのであり、かくすることによつて自らの滿足を得、歡びを感ずる。彼はこの愛撫の行爲によつて、確に幼きものを喜ばせると共に、自らの

歡びをかち得るのである。

勿論彼とても、幼きものへの愛の發露を此の如き卑近なもののみに認むるのではない。彼の愛撫はもつと深きところに、子供たちが直感し得ないところにも根を下ろしてゐるのであるが、それとても愛することによつて、彼自身の歡びを感ぜざる事ではない。

彼等の貧しき食卓の後に於て、話ずきの彼の老母がよくきのふけふの問題に就て論議を彼にふきかけてくる。

頻發する知識階級の戀愛問題に就て、性的破綻に就て、彼の家庭は老いたる一女性を中にして、若き彼等夫婦がよく語り逢ふ。あの博士と女歌人との問題、ある評論家の離婚、ある文士と少女との風聞など、婦人雜誌が喜んで取扱ふ題材がよく彼の家庭でも話題にのぼる。愛と性慾の問題に就ても可なり遠慮ない談話が試みらるゝのであるが、老人は必ずその結論を次のやうに云ふのである。

「何事も我身が可愛ければだよ。私がお前を可愛がるのも矢張り我身の可愛さからだよ」と。

彼はこの言葉を度々ある不快さを以てきくのである。卑しいものゝやうに思つてきくのであるが、然しそれが人間の奥に秘むどん底のものゝ叫びであるかと思ふと、一概にさう忌々しく思つて許りも居れなくなるのである。そして彼自身が幼きものを愛撫するときに、自らの快さを貪るが如くに、老人がわが身の可愛さに出發して、愛をたるゝことに何程のへだゝりをも發見し得ないと思ふのである。

三

彼は愛の根原を人間の本能に求むる。愛は理性的のものでなく、内からの刺衝につき動かされて、只だ盲目的に行爲するものであるとする。愛せねば居られぬから愛するのであつて、愛せねばならぬと理知が命ずるから、規範が強制するから、仕方なし

に愛するのではないと思ふ。本能の力が、彼の生長に快感を與ふる美に接した時に、彼はその對者に愛をしむける。彼は直覺的にその美を發見することがあり、從つて立所に愛する心になり、愛の行爲を行爲することがある。卽ち愛は美の發見に出發する。

然し彼が永く相親熟せるものに對して、やゝ久しき後に於て愛をうることもある。それは彼の眼が漸くにして美を看取し得たからである。一見して直ちに發見しうる程顯著な美の要素を對者が有しなかつたか、或はその要素を隱蔽してゐたかである。

その何れの場合にしろ、彼の生長が助けらるゝ時、彼の生命に快感を呼び起すときに、愛はその對者に向つて發せらるゝのである。いかに彼の理知が、ある對者に對して、『愛せざる可らず』と彼自身に命じ、その差圖に從つて愛しよう愛しようと、どれ程骨折つてみたところで、そこに彼の本能がはたらかぬならば、そこに美を發見することが出來ぬならば、彼は到底愛することは出來ぬのである。

彼がこゝに云ふ美とは勿論、形を有するもののみに就て云ふのではない。

四

彼は愛することによつて何ものかを自己の生命に培ふ。愛によつて彼れ自身の生命の深さを增し、汚れを淨めらる。古聖は愛は與ふるものであると云つた。有島武郎氏も愛は奪ふものであると云つた。彼はその何れをも信ずる。然しその何れにも滿足しえない。

愛する人にとつて、愛は奪ふものである。奪ひ來るが如くにみえるものである。彼は愛することによつて自らを增大し生長せしめ充實し行くからである。愛することによつて彼のあるものが滿足して行くからである。彼を生長せしめ、彼を充實せしめ、彼を滿足せしむるあるものは、愛せらるゝ人より奪ひ來つたものであらうか。

立場をかへて、受愛者の方から之をながめてみよう。愛せらるゝ人は愛せられたが

爲に何ものも失ふところはない。否却つてその人は愛せらるゝことによつて自らの生命に培はれたるを覺え、自己の生長を感ずるであらう。愛せらるゝことは確にその人にとつて嬉しい事である、滿足な事である。

愛は奪ふものである。然し又與ふるものである。愛せらるゝことは貰ふことであり、然して又與ふることである。愛するときに人は生長し、愛せらるゝ時に亦生長する。

五

更に第三者の立場にありて之を見よう。

甲が乙を愛する。甲は愛する人である。乙は愛せらるゝ人であるとする。この場合甲は愛することによつて何ものかを奪ひ來り、自己の生長を助長するとする。然してその爲に愛せらるゝ乙に於て若しも失ふところのものありとせば、そは決して愛と云ひうべきものではない。若し此の如きことありとせば、そは美しき愛の假面にかくれたる征服のみである。强者があくなき自己の生長慾を滿足せしめんが爲に、往々弱者を自らの餌食に供し、然も表面彼を愛するが如くみせかけてゐる例は、世間にもその例乏しい事ではない。

資本家が、自己の貪慾を充たさんが爲に、搾取の方便として勞働者にたるゝ溫情の如きものはまさにその一例である。勞働者は僅か許りの餌につられて、資本家に愛せられたと思つてゐてはならぬ。それは彼等が汝等を永久にしぼりとらんが爲の鼻ぐすりにすぎないからである。人が卵を得んが爲に雞を飼ふやうなものだ。

さて又、似て非なるものゝ一つに犧牲と云ふものがある、献身といふものがある。それは愛するが爲に自らの骨を削り、肉を殺ぎ、之を以て愛せらるゝ人を救はんとするものゝ行爲である。即ち甲は愛することによつて、自らのものを失ひ、はては自らの生命を殺して行く。然してこの場合乙は愛せらるゝが故に、得るところ多いのであ

る。この狀態を名けて甲は乙の犧牲になつたのであると云ひうる。これを乙の一面よりのみ見るとき、甲の行爲はまさしく愛であらう。然し第三者が大局にありて甲乙兩者の上に眼を放つとき、それが決して眞の愛ではない事を悟る事が出來る。

征服と犧牲とは、その一面をみるとき頗る愛の形式と似てゐる。然しこれは決して愛ではない。

犧牲について彼は云ひたき多くの事を有する。わが身を殺して人のために盡す、これは多くの場合美談として傳へられる。殊にそれが國家社會に對する場合に於てさうである。然しこれは無條件で肯定さるべき事ではない。彼は死によつて徹底的生命の充足を、刹那的に痛感するであらう。然し果してそれが眞の彼の滿足であつたかどうか。そこに彼の心理的解剖を要する。これらの事に就ては更に考を改めて言ふ事があらうと思ふ。

六

さて眞の愛は愛する人も愛せらるゝ人も、共に愛によつて失ふところなく、共に得るところあらねばならぬ。愛するが故に伸び、愛せられて伸ぶ。この狀態をさして眞に愛と云ひうる。然し乍ら愛は手段ではない。愛は彼が無限に伸展充實し行かんとする生命力の發露のみである。

甲も乙も、愛によりて失ふところなく、然も兩者とも愛によつて得るところありとすれば、愛こそはまさしく創造であると云ふべきである。然り、彼は云ふ、『愛は創造なり』と。

愛の極致は戀愛である。

戀愛に於て愛する人は、愛すると共に愛せられてゐる。愛せらるゝ人も、愛すると共に亦愛せられてゐる。愛と受愛と相互交錯してゐる。兩者は等しく互に奪ひ合ひ、

與え合ふ。貰ひかつ與えてゐる。兩者は愛することによつて自ら充足し、又愛せらるゝ事によつて自ら充足してゐる。一人にして二人の立場に立つ。第一人者であると同時に第二人者である。この場合最も愛の力は強められ高められ、深められ、淨められる。

人間の一生に戀愛の經驗あることはこの意味に於て最も仕合である。否戀愛は人間生命の生長上に於て最も有力なる糧である。

戀愛に次ぎて、彼は友愛のまされるものなるを思ふ。これ相互の間に人格その他の點に甚しい相違がないからである。

戀愛の極致は情死であるといふ人がある。彼はそれに同意する事は出來ぬ。死によつて刹那の充足を感じ、生命無限の飛躍をなし得たるものと解するは、肯けぬ事ではない。然しその情死せざるをえざるに至れるプロセスを考ふるとき、情死が全く窮餘の策であり、辛うじて求め得た逃避所たるにすぎぬ事がわかる。

戀愛の度を強め深め行くものは、兩者の間に存する障害である。男が女に（女が男に）愛を感じた時に、それが永久に片思ひで終る時に於ては、殆んど一人で情死する程のものはない。對者の心をはかりかね、人目の關を案ずるにつけ、戀愛は深まる。漸くにして意中を打ちあけ、そこに相互の愛が成立した時に、第一に來る障害は世間の目である。その人目を忍びて相逢ふことのたのしさ、その忍び合ふことに於て愛情は更に深まる。かくて父母の目、社會の目など樣々な障害を一つ一つに排除してすゝんで行く處に戀愛の生長がある。夫婦になりえても、親兄弟に憚りある間は戀愛はずん〳〵向上して行く。そして全々二人ぎりになり得て極致に達しその狀態が續く時、やがて爛熟したる果物の如く戀愛の實は落ちるを常とする。すべての障害を排しえた時、それはやがて戀愛の消える時である。かくの如く順當に戀愛が爛熟して來た場合に於て、二人は決して情死するものではない。二人は思ふ存分戀し逢ふ事は可能であるが、決して死を擇ばない。然し戀愛の過程に於て障害が餘

りに多く、とても二人の戀愛の順當な發達を計りえぬ時、せつぱつまつて二人は死を思ふ。然しこの場合多く世間的の他の事情を伴ふものである。金がなくなつたとか何とか云ふ樣な事情が、情死をたすける。

それらの事からして、情死は決して戀愛の極致でない事がわかる。何れの場合に於ても死ぬる事は――生命の破滅ばかりは、さう容易に肯定されるものではない。勿論唯死によりてのみ生きうる境地のありうる事をも彼は信ずるものではあるが……。

七

教育に於て愛がいかなる位置を占むべきかは、こゝにくだくだしく云ふまでもない。人々は口を揃へて均しく「教育は愛である」と云ふ。兒童は愛によりてのみ導かるゝ。愛の精神こそ眞に教育の精神であると稱せらるゝ。

彼もこれらの言を信ずる。愛がいかに教育上に尊いものであるかは、かくして抽象的に多くの人々は信じきつてゐる。まだ肩上もとれぬ若き教育者の口からも教育事業の上に、愛がいかに必要なものであるかをきく事が出事る。

それ程の愛について、教育者たちはいかなる見解を有するのであらうか。愛は愛だ。愛する事は愛する事だとさう云つて過しては居られない。愛の發露愛の本質について人々は深く思を廻らしてゆくがいゝ。

教育上に云ふ愛とは、決して世間一般の愛と別種のものではない。愛の意義に二樣はない。然し乍ら世俗一般に用ひられてゐる愛は直ちに教育の意味そのものである。彼の考に從へば教育とは伸び來るものゝ生命を充實伸展せしめる作業である。而して又愛と云ふも等しく、之れ對者（兒童）の生命生長を期圖する事にすぎない。

然し乍らこの俗解は、愛をして犧牲と云ふ風に導きやすい。教師は自己のものを兒童に與へ、自己を犧牲にして兒童のためにつくす。それが愛であると。それが正しい考でない事は既にといた。彼はいかなる場合と雖も、彼自身の生長を忘れてはなら

ない。

棄石となることは、棄石となることに自己の生きうる道を發見して初めて意味がある。自ら恋の止つた教師が、不斷に伸び行く若々しいものゝ教育に任ずる事は非常に罪惡である。不斷に自己の向上、自己の充實を念としてゐる教師こそ始めて兒童の生命の愛護者である。

ペスタロッチは、兒童を愛することによつて、遂に彼自身を完成した。彼の愛はよく兒童を生長せしめた。然し彼はそれによつて自らも大となつて、今日にまで生きてゐる。ペスタロッチにとつて選ばれた生命生長の方途はあの道より外になかつたであらう。彼は最も正しき道を發見したものと云ひうる。

愛は自己完成への道である。決して自己犠牲ではない。愛は自己否定ではない。何時の場合に於ても自己主張でなくてはならぬ。兒童を愛するが故に自ら滅び行く教師ありとすれば、それは最も唾棄すべきである。

情は人の爲ならず。愛は決して他人のためではない。人を愛することは自らを愛することである。愛しえざるものゝ悲哀はそこにある。愛しえざるものは、愛の對者を發見しえざるものである。從つて自己生長の道をはゞまれた人である。そこに悲しみがあるは當然である。

自己の生命は、宇宙の神秘に芽ぐむ。自己の生命を伸ばして之を完成することは、宇宙の心にかなふことである。兒童の生命も亦同一なる處に出發する。個の完成に向つて自己がすべてを奉仕しようとするは、やがて神の意志を完遂せんとするものである。生命は窮局に於て合一する。吾々は相携へて夫々自己に芽ぐめる生命の一角を護りとげる外に、とるべき道はありえない。

愛のクライマックスに於て、人々は自他の區別を發見し得るものではない。自愛即他愛であり、他愛即自愛である。再び云ふ愛は他人の爲ならず。自ら伸び行く姿が、びつたりと兒童ののび行く姿と合一したところに、教育的愛の眞相をみうる。彼が前

著、『生活を教育にまで』に於て歌つた『共に伸び行く生命の力』こそまさに愛そのものでなからうか。

かくて彼は、彼が長い間の思索であり、然して亦これからも大きな思索の對象としようとする生命至上の哲學に行きつく。彼はどうしても生命そのものにすべての規範をみ出ださんと思念するものである。生命こそ實に唯一無上の權威者である。

□ 愛すればこそ

一

多くの人は、他人を喜ばして自もを喜ぶ。他人の嬉しさうな樣をみれば、自分も嬉しいやうな氣持になる。然し世には他を苦しめて、その苦しむ樣を見て快しとするものもある。後者は少し變則だと思ふが個性はさまざまのものだ。

愛についても似たやうな事が、世上に行はれてゐる。甘美なる愛と苦鹹なる愛とがある。多くの場合、氣の弱い人は、躓きたをれた幼兒を抱き起してその塵を拂ひ、之をいたはるものだ。然し氣の强い人は決して之を起さない。だまつて之をながめて、その自らの力にて起き上るをまつ、起き上れればえらいえらいとほめてやる。前者が甘き愛なれば後者は苦き愛だ。情にもろい人は、かゝる場合、默つてみてゐるに忍びない。

自分自身の感情がたえきらないのである。起す事に先づ自分の快さをおぼえるのである。然も意志的な人にとつては、それをじつと見守つて、はね返して來る子供の上にある苦(にが)みをもつ快さを感ずるであらう。それは愛の二樣ではない。愛の發露が人々の個性によつて異れるを語るものである。甘き愛を眞の愛に非ずと云ふ人もあるが、それは誤りである。愛の本質から云へばむしろ甘きこそ眞の愛である。後なる愛は理智の要素を多分につき交ぜたもので、本能的のものではない。起してやりたいが、その子の爲を思ふて起さないと云ふのは、聊か不自然な氣持が手傳つてゐる。

甘き愛が母の愛とすれば、苦きものは父の愛だ。母の愛は人間を優美にする。人情のゆとりをつける。軟かみと圓みとをもたせるものだ。父の愛は人間を強くする。冷たくする。合理的な人への導きである。人間性の圓滿な發展を期する上にこの兩面が必要であることは云ふまでもない。然し強いて云へば愛は甘きものではなからうか。後者の苦く嚴しきもの。これは愛と云ふべくあまりに冷たい。

二

愛の鞭と云ふ事がある。鞭つ愛の力に人は生ひ立つて行くと。甘美の愛に溺れて、嚴しさと冷たさに飢えたものにとつては、鞭つ愛も必要であらう。然し鞭つものは矢張りその人の個に應じたものでなくてはならぬ。

弱さに徹すれば、そこに又強さがある。感情の極致に誰れか強さがないと云ひ得よう。弱々しさの極致に於て初めて強さの極致に達しうる事もある。情に育つた人を冷たい理智の鞭を以て哺まんとするのは、却て虻蜂とらずに終る事である。人間をひね曲つたものにする事である。

最もその出發に於て情の一面に偏したり、理智の一面に偏したりするのがまちがつてゐるので、兩樣を等しく一樣に哺みもりたてゝ行つたならば、さうした問題は起らない。

冷たい世間に生ひ立つて來た人間――、例へば幼にして父母を失ひ、貧乏にさいなまれ資本家に虐められ、あらゆる世の中の冷酷に反抗して自分を生かして來たやうな前科何犯と云ふ男が、忽然としてある人情の溫味にふれ、自己の誤れるこし方に目ざめたと云ふ話は、よくきく事である。此の如きは甘美の愛に飢へてゐたのであつて、その愛の滴りによつて初めて人間として蘇つたものと云ふべきである。

人間生活――殊に社會的生活に於て何れの方面がより必要であるかと云へば、勿論甘美の愛を欲する。苦きは愛の本質ではない。鞭つ愛よりも撫でる愛が世間には必要なものである。

撫でる愛――甘美の愛を低俗卑調のものとし、苦き愛、鞭つ愛を高等なものと考へてはいけない。苦き愛は深きところに考察を及ぼしてゐるものであるから、目さきに囚はれず、一寸目には憎むが如くみえるかも知れないが實は深く對者を思ふが故であると、さう云はれると甘き愛は一言の言葉もないやうであるが、決してさうではない。目さきにみて居れない心もちこそ、却つて根本的なもの、純眞なものであり、直ちに靈そのものゝ奥からとび出して來た、修飾と分別とのない愛の發露である。發露こそ刹那的であらうが、根ざすところは深い。人間性の奥から迸つて來たものである。

若しもその人の愛の發露が對者を鞭ち勵ますことにある快さを感ずるならば、或はそれを眞の愛と云ふ事が出來るであらう。然し人間らしく生ひ立つた人が、人の苦しむのをみて快さを感ずるであらうか。共に樂しみ、共に苦しむところに愛の見のがす可らざる要素がある。

三

教育の經驗ある人には何人にも思ひあたる事であらう。それは『可愛ければこそ』と云ふ云ひわけだ。君たちが可愛ければこそ叱るのだ。君たちが可愛ければこそ鞭つのだ。さう云つて子供を叱り或は撲る人がある。ほんとうに子供をいゝ子に仕上げよ

うが爲だと云へない事はない。然しさうした人には決して愛があふれてゐるとは云へない。

叱つた後で後悔しないだらうか。撲つた後で果してどんな氣持がするだらうか。叱つたり撲つたりした後では屹度自分は不快さに胸がむかむかするであらう。嬉しくて叱るものは恐らくゐまい。可愛さが溢れてゐてどうして撲る事が出來よう。なるほどいゝ子に育て上げようと云ふ根本の考はあらう。然しその考が、正しい手段によつて導かれつゝあるかどうかは云へない。

叱つたり撲つたりするのは、刹那の憤激に基く。自己自身その場の苦しまぎれから解放されようとする不正の感に出發する。これはどうしても眞の愛とは云へない。叱責打擲によつて彼我共に萎え縮み、その成長は却て阻まれるものだ。叱責したり打擲したりしなければ氣がすまぬのは、自己自身その場の滿足を得られないからだ。

この事は無責任、いゝ加減と云ふ事と混同してはならぬ。熱心な教師ほど叱る。不熱心な教師、子供がどうならうとかまはないと云ふやうな教師は少しも叱つたりしない。私立中學などでは大抵の教師が、生徒を叱らない。その代り生徒が講義を聞こうがきくまいが、行儀が惡からうがどうしようが、どうせ時間のきり賣りだ、この一時間さへすませばと云ふ氣で、ただ蓄音機のやうに天井を相手にその時間をすませばいゝと云ふ側のものが多いと云ふ。然し熱心な教師はどうもそれではすませない。從つて生徒によく聞かせようとて叱りたくなる。この場合前者は勿論不熱心、無責任だ。その不熱心なものが、生徒を叱らないから愛が深いとは誰も云へない。それを愛とまちがへる人はなからう。

然し後者卽ち叱る人が、愛があるかと云ふにさうも云へない。その場合の叱る心は愛に出發してゐるのではなく、自分の責任とか、その當座の自分の氣持とか云ふものに出發してる。その人の個性の問題だ。博大な愛が教師に溢れて居れば、生徒は自らそれに浸つて來る。叱らずとも靜にする筈である。博大な愛は叱責に超越する。愛は先

驅するものである。靜かとか騷ぐとか云ふ事は、愛の有無に原因する。騷ぐ――愛する――叱る――ではない。騷ぐ――愛乏し――叱らないではない。愛する――靜か。愛し得ず――騷ぐである。こゝに於て愛が人格の重大要素であることを思ふ。

私にとつて愛すればこそ叱ると云ふことは云ひ得ない。

四

可愛さ餘つて憎さが百倍と云ふ事も同じやうな事を表はすものだ。可愛さ餘つて憎むと云ふものはない筈だ。それは純然たる所有欲求の本能そのもので愛ではない筈だ。女を愛する。いとしと思ふ。然しいくら愛しても、いくら言ひよつても、女の方では從はない。そこでとうとう堪りかねて女に手荒い事をする。或は女を殺害する。この場合可愛さ餘つて――と云ふが、それは決して正しい考へではない。愛は彼我の生長である。殺す事は決して對者を生長せしめたのではない。これは愛の假面をかぶれる見苦しい人間の所有慾のみだ。

對者をいためて愛がありうるならば、愛は安價なものである。自己をいためて愛が初めて成り立つとすれば愛は苦きものである。愛は彼我共に快きものであり、彼我共にのび行くものであるところに、その懷しさをもち、至りがたき崇高さをもつ。

『愛すればこそ』と云ふ言葉は決して安價な云ひわけに亂用さるべき言葉ではないと思ふ。

第十　至上唯一の生命に額づく

——生の哲學へ——

一

彼は思ふ。

何事もわが心のまゝに生きたい。われの生活に絶對の自由あれと、自分自身の生活を生活すること、人の爲、社會のために枉げられぬ生活をすることこれが彼にとつて唯一無上の願である。

わが思ひ、わが信ずるまゝの生活が出來ぬならば、彼の生活は死に近い。彼は生きたまゝ立ち枯れの姿になることを恐れる。

人々は批難するであらう。

わが思ふまゝに生きる事はとても出來ない。各人各自が思ふまゝの生活をなすと云ふことは、社會の安寧秩序を亂り、世の中をして無道德の世界にするものであると。

然し乍らそれは人性を、惡とのみみるからの批難である。最も人の性が善であるか惡であるかに就ては、永い間の論議と研究が重ねられてゐるにも係らず、人々の信念によつてあるいは惡ともみえ、或は、善ともみえる。今に至つても兩說若しくは白紙說の存する所以である。

もとより人性には惡に親む傾向もあるが、惡を忌み之をさけんとする芽生もある。若し全き芽生を哺み育てる事を怠らなかつたならば、人が人を虐げ殺し合ふやうな惡に向ふ事はない筈である。

彼が何事もわが思ふがまゝに振舞いたいと云ふのは、世の中を無視して自分一人の存在と生長とを逞しうしようと云ふのではない。社會をして無道德の混亂狀態にしようといふのではない。彼はたゞ生活の規範を自己の內に求めようと云ふまでゞある。

人が命ずるからでなく自分の心がしかく命ずるから、かくすると云ふ風になりたいものだ。社會の眼があるからでなく、自己の心の眼が睨んでゐるから恐いのである。

彼がその思ふまゝに振舞はふとするのは、彼の心の中の見苦しいものに從はうと云ふのではない。彼の心の中の正しいものを欲求する心に從はんとするものである。正しいものとは何であるか、それは彼の生命生長にとつて、最も力あるものそれである。

二

彼は外にあるあらゆる規範の權威を認め得ないのではない。それが自己内心の要求と合致する時にのみよく、その權威を認むる。彼は外在のノルムに從つて自己を縛ることを好まない。彼は豫め繩張りをして遊ぶことを好まない。彼は適確に目標を定めて、一定の軌道の上を一足一足、踏みしめて行くやうな事を好まない。

端的に云へば彼は規範と云ふものをたてない。生命以外のものに權威を認めない。——それは自分より偉いもの、強いもの、大なるもの、正しいものがないと云ふ意味ではない——外からの力で自己を縛らるゝ事を恐れる。理想と云ふやうなもので、自分の突發的な、脱線的な生長を阻まれる事を恐れる。

世には自分で自分を縛りつけて、一生窮屈な思ひをする人が多い。人はそんなに金しばりにしておかなければ危いものであらうか。又縛りつけておけばその通りに行くものであらうか。彼はそれを疑ふ。

彼は思ふ。

生命は計り知る可らざるものである。そのいかに伸び行くべきか、いかなる方向をとるべきか、凡その見當はたつにしても、適確な見極めがつくものではない。自分自身の生命に就ては自分自らが最もよく之を知るにせよ、その質と、その伸び行く方向と、その極限とに就ては何人も豫め之をよく知る事は出來ない。それを何もかも見す

かしたかのやうに思い考へて、一定の軌道と、一定の目的に引きむけて行かうとする事は、聊か無謀である。彼はこの點に於て教育の効果についても聊か悲觀的である。消極的である。

生命は神祕不可思議なものである。彼の現在乃至過去の總和ではとても解する事が出來ない。況んや導く事をや。彼は彼の生命の流れに向つて、その障害を除く事の外に手段のあるを知らぬ。

人々の性を變質せしめる事は到底教育に於ては不可能である。教育は變質せしめる事でなく、その質に徹せしむる事である。例へば神經質の生れつきをして、膽汁質な子にしようとする事は、勞して効乏しいものである。神經質は神經質として、その長所を伸ばし飽迄も敏感に、デリケートにその性を徹して行くのが、その人間としても最もいゝ事ではあるまいか。

然しその神經質の赴く處を、豫めこの邊までゝ打ち留めようとか、こゝらでこんな風に引きむけようとか、丁度飴細工でもするやうに自由にあつかふ事はこれはとても出來る事ではない。然し教育者の中には好んでそれをやらうとしてゐるものが多い。伸び行くものゝ上にある規範を設けて、その生命の質と傾向との如何に係らず、その規範にまで從はせようとする。理想主義者が皆それだ。彼は理想主義者の教育に對する暴戻を忌む。

三

彼はこの年になるまで、自分に就て樣々に思ひわづらつた。そして今も尙わづらふ。彼の本質が何であるかゞはつきりしないからである。教育者としての位置に自分を見出したとき、それが果して自分の行くべき道であるかに惑ふた。今の仕事についても尙惑なき能はぬ。恐らく多くの人々も、自らの天分に迷ひ、自らの仕事に迷ひつゝ、その行くところを案ずるであらう。それがほんとうかも知れぬ。流れて止まぬ生

命の起くところは、とても豫め計り得る事か出來ないのであるから。

然し人々はそれらの人を嗤ふ。氣まぐれ者と云つたり、氣の變りやすき男と云つたり、一向かたまらぬ人と云つたりして輕蔑する。然し氣紛れにも、氣變りにも、不變なあるものがある事を知らねばならぬ。氣紛れものにとつては、氣紛れこそ永久不變の性である。

理想主義者は生命以外にある規範を設ける。それによつて生命を律しようとする。だから千偏一律になる。だから劃一になる。規範は硬化したものである。規範にはめる事は、丁度出來合洋服で間に合せるやうなものだ。樣々な異れるものを好い加減なものに打ち込んで、十把一束にして了ふ。そこに固定があり、沈滯があり、死がある。

生命は流れて止まぬ。規範にはまらない。不斷に向上し、分化し、統一して充實して行く。之を硬化せしめ、鑄型にはめようとするものは理想だ。外からの規範だ。生けるものを死せるもの同樣にあつかふものゝ仕事だ。

四

われわれは生きねばならぬ。飽迄も生きて行かねばならぬ。無限に生命の流れを助長して行かねばならぬ。若し死を肯定するものがあれば止む。生きんとする總ての人々は自己の生命を第一義に考へなくてはならぬ。生命は絶對唯一のものだ。何ものよりも權威あるものだ。生命の流れに從ふ事は、吾々が死を否定する事と同一である。

今日の思想界には、その生命本位の考が充滿してゐる。殊に教育界に於てさうだ。個性尊重論がさうだ。生命の綴方教授、生命の讀方云々皆さうだ。伸びて行くと云ふ言葉がさうだ、教育卽生活論最もさうだ。一切衝動皆滿足は明確にこの事を道破せるものだ。劃一打破もさうだし、全人教育も亦さうだ。創造主義自由主義一としてさうでないものはない。それにも係らず、生の見極めがはつきりしない爲に、眼がかすん

できて最後の最も肝要な處に行つて行詰つて了ふ。變節して了ふ。生命のみでは安心が出來なくなるのだ。

その最もいゝ例は、自由教育の主張者が新理想主義に立籠る事だ。自由教育と理想主義とは根本に於て相異れる性質のものである。それを抱き合せようとするのは餘りに蟲がよすぎる。理想の名は久しく人間を眩惑して來た。これからも亦さうであらう。人々は理想の爲に一たまりもなくひれ伏して了ふ。そして自分を失ふのである。

五

日本の學者たちに最も好まれるものは理想である。殊に倫理や教育を取扱ふ人々にとつて價値の名が尊く考へられてゐる。彼等にとつて當爲程尊いものはない。ねばならぬ。Ought to be この一語こそは彼等にとつて最も大切なものである。

彼も亦當爲を輕蔑するものではない。然し乍ら存在をより以上に尊重する。存在なくして當爲はありえない。存在は第一義だ、次で來るものは當爲だ。當爲のために存在を輕視するものは、自己否定論者であり、根本に於て死を欲する人々である。

然し乍ら、自由教育論者のあるものが、その自由教育に行き詰つて新理想主義に當爲を求めた如くに、人は自然に——人々の生命は自然に當爲を尋ねる、これが人間の生命の尊いところである。彼はこゝに一つの大きな題目を提供する。

あるより、べきか生れて來ないものであらうか。これである。

存在はまさに當爲でないか。これである。

長い間存在は當爲ではないとして、蔑まれて來た。彼はそこに疑をもつ。彼が思索の頂點に於て、存在がまさに當爲に合致せんとしてゐる。彼はこの境地を孔子の晩年にみる。七十にして心の從ふがまゝに行爲しても矩を越えなかつたと云ふのがそれだ。彼は彼が心のまゝに行動しても、決して桁が外れなかつたのである。

恐らく人間がすべて、生れたまゝの純眞さを、そのまゝに卒直にのばして來たなら

ば、何人も心のまゝに動いてよかつたであらう。それがほんとうの理想郷である。

彼は生命を讃仰せずには居られない。

彼の享けたる生命は、之を凝視すれば宇宙の生命である。宇宙の生命には必ず一定の法則がある。宇宙の生命はある原理に從つて活動してゐる。人には春を夏にする事も出來なければ、冬を春にする事も出來ない。花咲くも結實するも、まさに生命の當爲である。自然には自然の法則があり原理がある。

自然に從ふこと、自然の心を心として、あるがまゝに純眞に展開さして行く事に、何の過誤があらうか。宇宙の生命を出鱈目と思ひ、ノルムなきものと思ふものは、神の意志を冒瀆するものである。彼は自己の運命に逆ふて何事もなし得ない事を信ずると共に、神の心をうけて、純眞に生きて行くことの、いかに道にかなへるかを信ずる。

價値は客觀的のものではない。外在のものではない。價値は彼の心の内にある。彼の生命の内に宿る。彼の生命を深く尋ね求むれば、そこにあらゆるものが滾々としてわきあふれてゐる。彼は何も苦んでそれを外に求め、人々に仰ぐ事はない。自我をすてゝ何ものも存在しない。存在なきところに何ものゝ價値があらう。

神祕雄大、幽玄不可思議なる生命の力よ。彼は總てを棄てゝその前に額づく。そこにすべては解決される。われに惠まれたる生命は絶對唯一至上至尊のものだ、之に從ひ之を護り、之を展開して行く外に人間の道があらうか。

生命至上の教育こうした題をかゝげて、縷々彼が述べ來つたところは、元より一片の感想にすぎない。彼は是れを以て總ての人々を律しようとはせぬ。彼はこれからの大きなる仕事の一として、生命至上の哲學に出發して、その教育原理と方法とを建設せんとするものである事を告げて、本稿の局を結ばう。

□ 生命に即する新道德の樹立

一

現代の學校教育に於ける修身教授が、兒童學生にとつて何等の權威をも有しない事は吾れ人共に之を認むるところである。教育の實務に携はつてゐる人自身がその權威なきことをかこちつゝ、その無意味なる教授を續けてゐると云ふ狀態である。これは一體何處に其の根本の因由があるものであるか。餘程根本的に考察しなければならぬ問題である。

由來修身教授の目標として、道德的知見の啓發、同感情の涵育、同意志の修練と云つたやうな事があげられてゐる。そこで其の道德的知識と感情と意志の三者を養成するための方便物として、所謂修身教科書と云ふものが編れてゐ、各教師は之の教科書に從つて教育すると云ふことになつてゐる。

ところがこの教科書と云ふものが、誠にかびくさいものであつて何等被教育者の靈に喰ひ入るところがない。この形骸のみの修身教科書を使用してゐる間は、教育者が何程骨折つてみたところで力ある教育が出來るものではない。

秘かに洩れ聞く處によると、文部省の修身書編纂の任にあたつてゐる人の內にも、實は現行のそれに頗る不滿足の人もあると云ふことである。それでは何故自分の思ふ通りにせぬかと云ふと、そこが役人の悲しさと云ふものである。尙一番おくの方には貴族院あたりの頑固な眼玉がかゞやいてゐるらしい。

二

さう考へてくると、これは結局道德意識の問題となつてくる。現行の修身書が何れも舊道德の城塞に立てこもつて、時勢の趨く所を風馬牛に、あくまでも昔ながらの考

に束縛しようとする處に根本の缺陷が秘んでゐる。

この舊道德――教科書に取扱はれた內容と云ふものは、どうも子供には感興が乏しい。道德と云ふものはあゝ迄堅苦しく不快なものであらうか。私は決してそんなものではないと思ふ。眞善美聖その何れもに對する人間のあこがれと云ふものは屹度存する。恐らく何人も無道德の狀態を渴仰する人はない。人々のあこがるゝ道德と云ふものに立脚しない內は到底力ある修身教授が出來よう筈はない。

道德實踐のよろこび、これは必ず或程度迄は何人にも存在するこゝろである。その人の境遇事情によつて樣々なその生活が意識に左右され、一時全く道德に興味なきが如く見える人があつても、それは一時の變體のみであつて、何時の日にかまた道德にあこがれをもつ日がくるに違いない。

三

現代人のあこがるゝ道德的境地とは一體どんなものであるか。

これを省察することは實に現代人の有する人間性そのものゝ省察に求むべきである。

吾等は藝術家がその靈を打ちこんで描いた創作に對する時、よしそれが醜惡なる內容をもつたものにせよ、ひどく感激する。心を動かされずに居られない。これその作品の描くところが、吾等のもつ靈にふれる所あるが故である。その感激に立脚して教育をすゝめたならば、とにかく被教育者の心の上に何等かの力とならぬ事はない。

今の修身書にあげられた事は、いくら之を口をすくして語つてみたところで兒童の靈にはふれて來ない。これはその內容が既に死んでゐるからである。

新しい道德は社會組織の改更にまつものが隨分多い。

『仕事にはげめ』と云ふことを授け、さかんに其の實踐を促してみても、何故に仕事にはげまなくてはならぬかと云ふ問題が解決されぬ裡はとても力となつて行くものでは

ない。今日の狀態からすると仕事に勵むことは立身出世の基であるからと云ふ風になつてゐる、――これは勤勞それ自身に獨立した價値を認めぬものであつて、やがてそれ自身力を失ふ所以である――立身出世と云ふことも今日の狀態では金持になることなことをして百萬長者になつた者もある。遊んでゐて百萬圓の財產を父祖から受けつぐものもある。投機的な事によつてまんまと大金をせしむるものもある。何も金次郎みたいに粒々辛苦の勞をつまなくてもいゝ。それに又一方にはいくら稼いでみたところで、貧乏に追ひつく努力なしで、一生頭の上りつこない人も隨分と多い。さう云ふ世の中にゐていくらかせげ〳〵といつたところで、かせぐわけはない。

それよりも吾等は人間の本性に突入して、ちがにかせぐことの樂みを味はせたい。かせがざることの無聊と苦痛とを語りたい。活動本能の助長と善用とに着目したい。そこに新しい德目の意義がなり立つと思ふ。

孝行に就てもさうだ。口をすつぱくして孝をといても大して功能はない。時勢はむしろ親の子に對する心得を要求してゐる。たゞ家族生活をなす上に於て、父子兄妹同居して互に相唯み合ふことの不快は幼き子供それ自身にも十分に分る。同樣に互に相愛し合ふことの樂しさも分る。その樂しみを樂み、不快をさけんとするところに孝行の意義を認めたい。孝行せざれば兒童と雖も何となく自分自身が不快なのである。

四

こうしたことは一々あげて行くまでもなく、何人も少しく反省すればわかる事である。すべての道德は圓滿完全なる自己の生長發展に向つてのみ意義を有して來る。人間も亦あらゆる生物と共にその宗族の永遠なる發展を希求して止まぬ。然しその發展に向つては人類の共同生活を娛むと共に、對他的の種々なる本務を生じ且つ之を實踐する事それ自身にも娛みを有するものである。そこに新道德は根ざしをおかなければ

ならぬ。

若し今日の教科書を肯定し、なるべく之を活用しようとする好意に出づるならば、其の取扱上に於て多分に藝術的方法が加味されなければならぬと思ふ。藝術的方法とは何であるか、それは例話にひかれたる人物の心理狀態をつとめて現代化して深刻に堀りさげて表現することである。選ばれたる德目の精神をば、つとめて現代風に解釋し、兒童の有する道德心を之に共鳴せしむべきである。

藝術的方法を加味せんには、實地教授者に於て其の教材に對する深き省察と解剖とを必要とする。單なる教師用書の一過讀位にとゞめず、其の表はされたる人物の心を心として、自らも亦かゝる境遇におかれたるが如くなるべきである。透徹せる理性と、灼熱せる情意とによつて教材を縱横に解剖し、之を如實平明に兒童の前に表現すべきである。

本居宣長が本を整頓した例話が引かれてゐる。宣長は本を探す時の便宜を考へて整頓したとかゝれてゐる。恁うしたとき方は矢張り價値がない。私は往々机上や身邊を亂雜にしてゐる人をみる。そしてその人は云ふ。これが尤もよい整頓の仕方だと。たま〳〵人がその机邊を整頓したりすると、物を探すに大迷惑を感ずると云ふことは決して少くない。

これも整頓それ自身に價値を認めることだ。若し私の考から之をとくならば、私自身の整頓に對する氣持からして宣長の心を忖托したい。(これは或は宣長を誤るものかも知れぬ)。亂雜な書齋に於ける不快、私は机上の一物でも其の所を得てゐなければいやだ。床の上におかれた花瓶の位置が一寸横によつたり傾いたりしてゐても不快だ。夫々に物はその占むべき位置を有する。その位置は子供にもそれ相當に分るものだ、何だか落ちつきがない。何だかいやだ。その感じを尊重して整頓の習慣を養ふて行きたい。

すべては内よりの欲求に從ふ事だ。外よりの强制、外よりの誘惑、外よりのくつつ

けでは何にもならない。人には整頓しなければ不快だと云ふ感情があるものだ、それを引きのばして行きたい。宣長がいろいろな忙しい事情があつたにも係らず整頓しなければ氣がすまなかつたのは、必ずしも又物を探す時の便利ばかりでない。私は内の臺所に下りたつて用をする事は滅多にない。殆んどないと云つてもいゝ。然しその亂雜な樣子をみるのは此上もなく不快なものだ。宣長の心も亦これであつたらうと思ふ。

五

心に納得が行くまで說きあかしたい。平明如實な叙述はまさに一個の術であつて、この心地は多少とも藝術家がその創作を表現する態度に學びたい。子供の心も堀りさげて行けば必ず泉が湧いてゐる。修身教授の實際はそこまで行かねば力はない。これに關しても多くの云いたい事があるが、餘白がないから他日に讓る。

第十一　第一原理としての生命

――教育のための教育――

一

人々は何の爲に教育を受くるか？
親は何のためにその子を教育するか？
國家は何のために教育施設をなすか？
これらの問題は殆んど自明の事として、人々は不問に附してゐる。今更の問題でないと空うそぶいてゐる。然し考へてみると案外、桁の外れた事が多い。
世には生活準備のために一生懸命になつて教育する教師と父兄とがある。その誤りである事は、教育卽生活論の主張が十分に之を指摘したから、こゝではくり返さな

い。進んだ教育者は漸く子供の生活を生活させる事を主張しだした。然し事實世間の有樣をみると、とてもまだまだである。第一そんな事を云つてゐては中等學校の入學試驗に合格しない。生活もクソもない。試驗さい合格すればいゝ。そこで學說としては教育卽生活論に左袒するが、事實としてはまづ生活無視、詰込豫習、受驗準備に沒頭して了ふ。そこで教育は——小學校の教育は（恐らく中等高等の教育も亦）入學準備のためにすると云ふ事實になつてゐる。

中等學校に入學しない人に就ては尙更ひどい事がある。はがき一枚かけぬ教育と云ふ批難の聲がそれだ。教育を以て直ちにある事を得、ある物質的報償を求めんとする考がそれだ。彼等の一味は、神戸や大阪にある商工補習學校の教育の如きものを以て、最もよい教育の成果と信ずる。それらの學校を卒業し又はある學科を修了すれば、某々の工場に於て、職工としての賃錢を五錢とか十錢とかましてくれる。卽ちこの場合生徒は教育を受ける事によつて、自己の賃錢の增額を企圖してゐる。教育の目的は多く金をとるにあると言ふわけだ。

さう云つて、商工補習學校の教育をのみ笑つてはいけない。大學を卒業しても月給にありつけぬと人が笑ふ。だから大學に學ぶ人も、又學ばせる人も、早く卒業して月給とりにならう、しようと云ふ事を最も大きな目的としてゐる。これは爭ふべからざる事實だ。さうすると教育の目的——何のために教育するかと云ふ事は、まあ金をうるためと云つても大した間違ではない事になる。

人は金を得るために教育を受け、親はその金儲けせしむるために教育を受けさせる。それが果して教育の目的であり、教育の意義であらうか。恐らく教育を考へるほどの何人も之を承認はすまいが、然し又何人もこの事實を否認する事も出來まい。

あゝ滔々たる唯物的教育事實の存在、爲にせんとする教育の跋扈。

二

國家は何のために教育施設をなすか、これは重大な問題である。

恐らく國民の教育を完全にせんが爲だと云ふ事にまちがいはあるまい。何のために國民の教育を尊重するか。それは國家有用の材を養成せんがためであらう。國家に忠良なる臣民を作らんがためであらう。

それに間違はない。國家はその存續發展上、須らく教育を旺にして忠良の民を作るがいゝ。然しいかなる人間が忠良の民であるか、いかにせば國運は充實發展すべきかそれに就ては一寸考へる餘地がある。

獨逸は教育の普及徹底した國として、世界にうたはれた。その結果異常なる科學の進歩を來し、國力日に日に發展し、世界の脅威となつた。すべての教育、すべての教育設營が國家のために行はれた。俄然世界大戰は獨逸を今日の悲境にまで失墜せしめた。彼の普及し徹底した國民教育は、少なからずその國家を禍した。

ソヴエットロシヤは、兒童を國有にし、徹底的に國民を赤化せんがために國民教育を確實に政府の手に納めようとした。然しその試みは全然失敗に歸した。

日本の教育方針、殊に教育を國家的に統一しようとする考は、何處か獨逸のやり口に似てゐる。と云つて何も獨逸の二の舞をやるだらうといふのではないが考へてみる必要があると思ふ。

この子を教育しておけば、大きくなつてから俺を養つてくれるからと云ふ考から、子を教育する親を笑ふ僕は、國民を教育して、その報償を期待せんとする國家を、同じ線上に並べて考へたくなる。それは何れも教育を、ある事のためにせんがために行ふものであつて、自分自身の存在と發展とに、他を方便的にあつかふものである。

三

教育は他の方便であつてはならぬ。教育を何かためにせんとする下心から行ふのは

誤つてゐる。教育はそのもの自身のために行はれねばならぬ。教育を受ける人自身の正しい生長、何ものにも囚はれぬ生長のみを企圖すべきである。教育を方便物に考へるから、人の心を害ふ。社會が濁つて行く。これは社會の組織そのものも惡い。

科學の研究そのものすら、他の方便であるべきではない。巧い發明をして、利用厚生しようとの下心から出發した科學者に、いゝ研究は出來ない。學問の眞實なる熱愛者が、何ものも忘れて研究の興味に沒頭する時、初めて偉大なる發明があり、その結果が利用厚生となる。因果の關係を逆にしてはいけない。

教育の方便化を忌避する僕と雖も、結果の上に於ては同じ立場に立つかも知れない。と云ふのは、完全な教育を受け、立派な人間となつた人は當然國家のために寄與して行くと云ふのである。親のためになると云ふのである。金もとりうる力をもつと云ふのである。人間の正しい生長――その結果人間らしい人間が出來、人間らしい人間にして初めて國家社會に有用の材たるであると信ずる。

教育卽生活論の主張者が、眼前の教育手段上の事をのみ云々して、大局に於て兒童の生活を否定せんとする大きな力あるを悟らぬのは迂愚である。教育卽生活を徹底するならば、子供の生活を否定せんとする外在の大きな力――親や教師や國家社會といふものゝ我まゝ勝手な要求を退けなくてはならぬ。そして子供は子供としての生活を十分に享むことによつて、初めて子供らしい子供となる。然して子供らしい子供こそやがて人間らしい人間となるのである。

吾々はその何物にも拘束されない人間の生長を企圖する。完成した人間を國家の如何なる位置に活らかせようとそれはかまはぬ。子供の中から豫め下心あつて人間を育てることを否定する。柱にしようと板にしようと、棟木にでも梁にでも、それは出來上つた結果とその要求とによつて然るべくやるがいゝ。何になりと使つてほしいと、投げ出しうる良材を山の如く養成すること、それで足りる。

教育は政策ではない。教育の成果は國家社會の上にそれ自身大きな影響を與へるものであることは云ふまでもない。然し獨逸やロシヤが試みたやうに、教育を全く政策とし、方便としようとしてはならぬ。教育はそれ自身獨立したものである。若しも教育が國家政策として成立する部面があるならば、それは學校を盛に作り、優良の教師をどんどん養成し、教育の爲に澤山の經費を支出し、國をあげて人々が教育を思ひ教育を尊重するが如くする事である。教育の內部に立ち入つてある底意のある要求をなし、期待を有する事は、多くの場合面白くない結果を作るものだ。たゞ眞に人間の人間らしい教育をなさしむべく施設してやればいゝと思ふ。

四

一體永遠の國策など云ふものがありうるものか、どうか。若し眞に永遠の國策ありとすれば、それは教育を旺盛にすると云ふ位の事ではあるまいか。その事を外にして何の永遠の國策がたて得よう。

政治家は眼前の現實にのみ眼を集注してゐる。否現實以外に力を用ふる事は到底出來ないのである。眼前の事實にして、今にも解決すべき問題があまりに多くころがつてゐるのだから、それを放棄して永遠の策を考ふる餘地はあり得ないのである。

何時の世、いかなる內閣の時代に於ても、不變に立てうる國策と云ふものは、たゞ教育を旺にするといふ事位であらう。誰か今より十年前に此の如き軍備縮少の風潮を豫期したらう。苦心慘澹してやつと進水するに至つた巨艦をそのまゝ爆沈せしめなければならぬと云ふ議論が、世界的に提言される事を、誰が初めから豫期しえたか。軍備を十分にしなければならぬとは、內外一樣の叫であり、要求であつた。然もその結果はどうか、軍閥者流一世の誇は、まさに四面楚歌の趣に變じたではないか。

獨逸にしろ、ロシヤにしろ、その全盛の帝政時代に於て、革命の來ることを誰か豫

期したらう。かくなると知つてゐたならば、かうするではなかつたと、彼等はひそかに悔んだ事であらう。

眞に國家を思ひ案んずるものは、雲の如く有爲有能の人材を養成する事に沒頭せよ。有爲有能の材とは人間の完全なる人間的發達をとげた人々に外ならぬ。軍人のすきな人は軍人に、勞働を愛する人は勞働者として、學究を生命とする人は學者として、實業家、役人、教師凡てそのなさんとする事の種類は問はないのである。

軍人のみ威張る國を忌む。黄金のみ尊ばれる國を憐む。理知のみを有難る學者を厭ふ。論理にのみあこがるゝ教育を排する。藝術の分らぬ政治家、情味の乏しい官吏、自らの何ものも持たぬ教育家、凡てながめ來れば片輪な人間の多い事よ。これ教育がある事の方便としてのみ役だてられて來た結果に外ならない。

五

外からの規範といふものが果して役にたつものであるか。教育を何かの方便とすれば、勢その目的に合致するやうに、彼等はある規範を作つて、兒童生徒をしてその規範にあてはめようとする。然し果してよくその規範に合致せしめうるであらうか。多くの教育事實はその事の失敗を語つてゐる。誰か今の學校教育を憧れるであらう。至るところに學校教育の非難と罵倒とをきく事が出來るではないか。若し人々が在學時代をかへりみてそこに懷しい思出があつたとすれば、それは多く七むつかしい學校の規則などを超越して、眞に人間らしい生活を享樂し得た時の事のみではないか。誰か糞やかましい校規に從順であつた事に喜びを感ずる。學友相會して青年の日を青年らしく遊び得た事にのみ追憶の花は輝いてゐるではないか。

教育といふ事はしかく人間を縛る事であるか。青年の欲求を退げ、少年の活動を牽制する事であるか。何故にしかく束縛し牽制しなければならぬのであるか。思ふにこれ人間に眼ざめなかつた過去の人々の誤りではないか。

外からの桎梏の最も大なるもの、最も力強いものとして吾々は國家の權力をあげねばならぬ。眞の人間らしい人間を養成する事にとつて國家の力は最も之を妨げやすい。國民教育の名に立てこもつて人間の自由なる發展を束縛しやすいものである。

國民教育とは人々をして國民化することである。その國の國民として、最も國民らしくあり、國家に忠良であり、有用であるべき人材を養成する事である。此の如き國民教育に何人か反抗しよう。僕も亦此の如き國民教育の一日も忽にすべからざる事を、より以上に痛感するものである。

然し乍ら一度その國民化の內容、國民らしいといふ事の內容を吟味し、いかなるが國家有爲の材であるか、將來の國家は凡そいかなる人材を要求するであらうかを考へると、そこに大きな異見の流れを見出すのである。

嘗ては軍人こそ最も國家有爲の材であると思はれた。忠義は軍人の專賣でもあるかかのやうに見えた。そこで青年は軍人たらんとして、等しく軍人養成の學校を目ざした。果然彼等が卒業しようとする頃、軍縮の風は吹いて、青年は惱みをおぼえるに至つた。凡そ計り知る可らざるは、將來のことである。

勇壯活潑であること、まかり違へば腕に訴へて——干戈をとつて國威を發揮しようとのみ考へた事が、ある時は却て國運の發展を阻害した。尤も忠良であるとのみ考へられた人々の行爲が、實は却て國を禍して不忠の事となつてゐたとも云ひうる事がある。

國民化することは、人々をして國家の傳統に浸潤せしめて、舊態舊樣を一途に墨守せしめ行く事ではない。誰か群議を排し四面楚歌の裡にあつて、一人開港の說を主張した井伊大老を不忠の臣と云ひ得よう。國家の前途を思へばこそだ。時と場合によりてはその國の傳統を無視し、舊態を打破するが如き事が、却て國家にとつて忠良の行

爲でない事もない。大勢を察し、前途の行路をみて、國民を導くことは、一世の先覺者にのみ許さるゝ特權である。凡衆はたゞ白紙の如き態度をもつて、生ひ立ち行くものゝ束縛なき成育を期待すれば足りるではないか。

六

吾々は何ものにも囚はれず、人間の正しい生長をのみ生命とする教育を欲する。然も此の如き教育を全人類の上に行きわたらせたいと思ふ（教育の世紀社はこれを目的とする）。そのために吾々は飽迄も個人を尊ぶ。個人の天分を存分に伸展せしめ、これを生活化することを祈念する。天分は多種多様である。決して教師の下心を以て之を牽制したり、變質せしめたりしてはならぬ。天分の生活化は生活による天分の發揮であり、發揮せられたる天分を生活に實現する事である。その結果として當然人類の文化は伸展する。所屬國家の發展、もとより見るべきである。

此の如き所期が到達せらるゝ爲に、吾々の信ずる教育に個性尊重がいかに重大なる位置を占むべきかは云ふまでもない。

兒童の自發活動こそは、吾々の信ずる教育に於て最も歡迎する處である、然し乍ら吾等は彼等の自發活動を促すべく、餘りに立ち入つたる指導を試みる事を欲せぬ。暗示や、示唆の下心ある教育手段をも餘りに歡迎しない。たゞ吾等は眞に兒童内發の興味を尊重する。眞に兒童の生命の囁きをきく事を念とする。彼等が生命の躍進する爆音に、ひたすらなる耳を傾けたいのである。然して一度内發の興味に接する時、吾等は最も新鮮なる指導をその上に加へようとする。然り新鮮でなければならぬ。云ひ古し、使ひ古しのお座なりな指導では、兒童の潑溂たる生命は承知しない。この意味に於て教師も亦、眞に常に伸展生長して止まない潑溂たる生命の持主であらねばならぬ。

即ち吾々は教育の第一原理として、たゞ一途に兒童教師の生命を押し立てようとす

る。生命の向ふところ、生命の發露するところ、そこに新鮮なる快適の指導が行はれる。然もその指導たるや教師の生命の欲求に從ふものである。別に教育上の規矩はない。指導上の規矩はない。生命が標的であり、生命が規範であり、生命のみが原理である。總ての外在的規矩準繩を排斥しようとする。

從つて我々の理想とする學校生活は徹頭徹尾、教師と生徒との自治であつて一切の外部的干渉を排斥する。教師と云ひ生徒と云ふ差別すらもなからしめようとする。たゞ幾人かの團體がお互にその生長のために自ら案じ、自ら守り、自ら從はんとするものである。然も更にすゝんで團體それ自身の集團的干渉すらも斥け、徹底的個人自治の境涯に憧れをもつものである。集團の成員は徹底的に自ら治めて、思ふがまゝに自らの生命を伸長して行くがいゝ。そして敢て集團の存在に妨害を加へず、相互に、相互の生長を期しうる境地を出現したいと思ふ。これは必ずしも不可能の事ではないと思ふ。何人もわれ一人の自由と放埒とのみを欲するものではない、人々相倚り相扶け合ふて生活を享受する事の樂みを、何人も祈念するものである。生命自然の發露が必ずやかゝる境地にまで團體を導き行くものであらう。

此の如き教育の窮局として、人々は自己の生命に無上の尊嚴を認め、人類生活に於ける自己の位置を自覺すると共に、同樣に他の人々……全人類の上に宿れる生命の尊嚴にまで考へ及ぶであらう。既に說いたやうに人々の生命は、全人類共通の大根元まで遡ることが出來る。われに宿れる生命も、彼に宿れるそれも、やがては同じ泉から湧いたものである。他上のあらゆる人々が相互に相扶け相倚つて生長し行かんとする事は、やがて又自然の道理であり、神の攝理であると信ずる。

濁れる世、それは純良なる人間の生命の泉に、樣々な障碍物を放棄して、その流れ行く道を阻害した結果に外ならぬ。現代教育のいたましい努力は、その泉に投ぜられ

た様々な邪魔をとりのける事にのみ注がれてゐる。幼きものゝ靈の中にくい入つてゐる惡しざまのものを、とり除くことにのみ沒頭してゐる。それもまた大きな教育の仕事であらう。然し吾々は黄河の源を清うする事を考へねばならぬ。次から次へと濁されて行く河の下にあつて、その濁れるを清めんとする努力に之れ日もたらず、流れ本來の行くべき道をも顧みるいとまなきを憂ふ。

湧き出でし清き泉にまづ妨ぐるものを除け、次いで妨ぐるものを押し流し行く力を養へ、泉の流れを増大せしめよ。放り込まるゝ塵芥を淨化するまでにその力を大きくせよ。

泉の方途は神のみ之れを知る。流れ來るものゝ力は無限の連續である。教育のみよくその伴侶たりうる。然り、わが信ずる教育は生命と終始し、生命を以てその第一原理とする。生命熱愛の教育のみ、永遠の光を放つであらう。

□　自我は天才である

ヘルダアは好い事を云つた。「自我は天才である。」

自我は無限無終の力をもつてゐる。

自我は多様復雜の素質を占有してる。

自我の流れは、いくら汲んでもつきない。ほればほるほど滾々としてわき、澄みきつた底に寶玉のやうに輝く。

自我を掘れ——。

そこにすべてがある。

何ものも外に求むる事はない。

行く道も、尋ぬる花も。
甘美も　苦鹹も、
お前を伸び立たせる教育はもとより、
このわたのやう鹽辛い道徳の味も、
ヴィナスの精がとけ込んだやうな甘美な藝術も、
おぼろ夜の河岸にさゝやくせゝらぎのやうな宗教も、」
すべての文化は自我の底にひそんでるのだ。

その代りまた、
猜み、怒り、恨み、憤る。様々な醜悪の唸り。
かたり、傷け、盗み、殺す。陰虐な相。
それも皆　自我の表現だ。

人をそしるな、世を呪ふな。
人に望むな、外に求むるな。
すべては自我が知つてゐる。自我は天才だ。」

我々は直覺によつて生活せねばならぬ。我々を欲望の奴隷たらしめ、又一切のものを凝固せしむるが如く、我々自身を束縛する悟性から、我々は自らを解放せねばならぬ。生命への直覺的歸依によつてのみ我々は道德的自由を獲得する。この故に生命そのものは、眞の存在を構成するのみでなく、又眞の生活目的をも構成する。それと同時にここに總ての人に對し同一の課題は存在しない。むしろ各人が自由なる生活によつて自己の特殊的生活目的を自由に選擇せねばならぬ。

（ベルグソンの生の倫理學――生の哲學より）

隨筆

山羊の鬚

□　淋し味

抱月は四十になつてから妻子をすてゝ戀人に走つた。藤村も四十越えてあの苦い戀を得た。花袋は三十五六の時にあの出世作の蒲團を書いた、云ふまでもなく其の主人公は自分自身の事であらう。みんな四十内外になつてからの戀さはきだ。私は自分の記臆から敢て文學者だけの事をかいた。然かし世間の實相を眺めてみたならば此の種の事はあらゆる男に見出さるゝ事であらう。

蒲團の中に表はれた中年の人の淋しさを私は此の頃しみじみと感ずる。私が初めて蒲團を讀んだのはあれが發表された年で、まだ十八九の若物の折だつた。であの主人公の淋しさと云ふものはすこしも分らなかつた。この頃或必要から讀み直してみたら私は讀むに堪えない位に犇々とその淋しさを感じた、單調な生活に飽き、人生の淋しさに倦んだ主人公の心持が私を被ひかぶせた。

私はこの頃頻りに淋しさを感ずる。まだ三十をいくらも越してはゐないけれども、私のこし方は優に人々の四十年に相當する。それだけ私は多くの人世の姿を觀た。觸れた。體驗した。その意味からすると私は生理的にこそまだ三十そこらであるが、心理的にはもう四十になつてゐるのかも知れない。此の淋しさと云ふものが、それではないかと一人で考へることがある。

元來私は子供の折から淋しがりやであつた。騷々しい所に行くのが大嫌で、お祭やお芝居や何かにさへ滅多に行かうとしなかつた。まだ子供のくせに月見草の咲く川べりでぼんやりと行く水を眺めて涙ぐんだりするたちだつた。一人留守居してゐて淡くらい二階に上つて、古い書物を引き出してみたり、子供の折の寫眞や、綴方などをみたりする事の方が却てたのしかつた。四季の中でも秋が一等すきで、裏の林で櫟の葉が落ちつくす頃落葉を踏んでぶらつくのが此の上もないたのしみであつた。恁うした趣味は今でもつゞいてゐるものゝこの頃では又別種の淋しさを感ずる。

私は人生の孤獨を樂んだ。自分のライフの荒凉たる姿を眺めて、風よ吹け吹けと歌つた。はてしなく打ち續く高原、ざうつ、ざうつと風が荒んで、雲ばかり慌しう走る高原、あとにも先にも行く人のない高原を、自分だけたつた一人、とぼとぼと行つてゐたのだ。それが自分の運命なのだ。この淋しさを誰が知らうかと自分一人でなげいた。なげきつゝ娛んだ。自分は只一人だ。人生の旅にほんとうに伴侶になつてくれる人はないと思つた。然かしそれはまだ私の今の淋しみとは違つたものであつた。

親戚から見離され、親に捨てられ、友もなく女もなくて、拗ねた若者の心であつた。賴りなさを淋しむ淋しさであつた。

今私の周圍はこしの方の苦しさ淋しさに比して、賑はつてゐる。私は親を得た、妻を得た。そして子を得た。多くの友もある。知己もある住居は大東京のまん中、そこに私は慌しい仕事に從ふてゐる。一日として强烈な刺戟に惱まされぬ日はない迄に激しい生活を送つてゐる。それにも拘はらず淋しさがひしひしと迫つてくるのはどう云ふものだらふ。一人居る淋しさには娛みがある。懷しみがある、然し環境が賑かで、周圍にはいろいろ强烈な刺戟がある中にゐて味ふこの淋しさはとても堪へきれるものではない。私はこの淋しさを表現する事が出來ぬ。三十にならぬ人々には恐らくはこの淋しさは分らぬであらう。たとへ私が藤村や花袋の筆をもつてゐてこの淋しさを表現しても若い人には了解されぬことであらう。

私はこれまで幾度すゝめられても吸い得なかつた煙草を、此の頃になつて時々すつて見たいと思ふ事がある。飲めもせぬ酒を飲んでみたく思ふ日がある。暖かい異性の血に觸れたくて堪らない日がある。然し酒や煙草や女でこの淋しさと云ふものが慰されようか？私の有する理知がそれを肯定し得ない。

金錢でも名譽でもこの心を充たしうるものではない。今のところこの淋しさを暖めてくるゝものは只だ文藝だけである。然かし文藝はこの淋しさを淋しくしないやうにしてくれるのではない。彼の力は私の淋しさにより一層の淋しさをまして呉るゝ。私

はそれが娯しい。それが嬉しい。小説を讀んで淋しさに泣き乍らそれを娯みつゝ自ら慰めて居る。私は更に深くこの淋しさに徹してみたいと思ふ。それは矢張り私を深くし大きくする所以であるやうに思へる。

あゝ淋し味よ來れ。騒音喧囂の巷に立つ吾に、ほんとうの淋し味よ來れ。

私の妹たちがよく電車の中で男からいろいろな事をされた話をする、或時はつり革をつかんでゐる手の上を、しつかとつかまれたと云ふ。ある時は腰かけてゐる股を、兩膝でしつかとはさまれたと云ふ。又或時は人ごみに紛れてか車室の偶にぴつたりと押しつけられて、頻りにお尻をなでられた事もあつたそうだ。そしてそれ等の事をする男と云ふものはみんな三十から四十まで位のものだと云つて居る。私はそれを笑つてはきいてゐるけれども、心の中では泣きたく思ふ事すらあつた。年が行けば誰でも慊らぬ心に、それと自覺こそしないだらうが、人生の淋しさと云ふものが迫つてくるものであらう。そして多くの人がその淋し味を異性によつて、肉によつて充たさうとするものだらう。そこが所謂人生の危機と云ふのかも知れない。

□ 恥かしい

車室は割に空いてゐた。これ位ゆつくりだと寢臺も入らないと思ひながら私は晩飯をとる爲食堂にはいつた。食堂にはカンナの花が匂つてゐた。横濱を過ぎて國府津にはまだ可なりあると云ふところ、私は自分の室に歸つた。室の戸を引きあけるとむつと許り鼻についた臭氣があつた、室は殆んど立錐の隙間もなかつた。座席は元より、板の間にもトランクや風呂敷の大包が積まれてあつた。煙草の煙が濛々と室内を渦卷いてゐた。トランクの上に腰かけたり、風呂敷包によりかかつたりした人も澤山だつた。それが皆日にやけた色の黑い勞働者風の顏色であるが、みんな不恰好な背廣を着けてゐる。女も洋裝だ。赭黑い顏に眞珠の首飾やゴテゴテとさした金の指輪が、一見してアメリカ戻りの一團だと知れた。

この一團は横濱から乘込んだのだらう。例の關西の角のない言葉でペチャクチャと饒舌つてゐる。私は其の間を縫つて列車の中央に自分の席を探した。そこにはシーツも敷いてあつたし其の上には讀みさしの本と新聞とがのせてあつたが、そんなものはどこに放りやられたか一寸眼につかない。私はむかつとした。この亂暴なる闖入者の一團に對して云ひ樣のない不快を感じ乍ら尙も其のあたりを探した。丁度そこに私と一緒に東京驛から乘り込んだ紳士があつた。私の不快な顏をみて、氣の毒さうに云つてくれた。

『いや實にどうも酷い、そこはあなたの席だと云つたんですがね、何しろ大勢なもんですから』

その言葉をきいて私は少し許り軟らいだ。

『あゝさうでしたか』

慥に自分のゐた所と思へる處に、腰かけてゐたアメリカ戻りに向つて云つた。

『ここは僕の席ですが……』

シーツを敷いておいただけが自分の特權なんだ。が然しこんな場合嚴密にそんな事が云へるだらうか？私は自らあやしみ乍ら其の男を見つめた。男は曖昧な返事をしたぎりで、元より動かうともせぬ。

『シーツや本はどうしました？』

男は無言で上の網棚を指した。そこにもトランクやバスケットなどがぎつしり載せてあつたが、私の持物はその間にクチャ〳〵に放り込まれてゐた。『何と云ふ無茶な連中だらう』私は其の男につかみかゝりたいまでに不快になつた。

『どこ迄行くです？』私は山口まで行くのだが恁うして夜を徹して立ちつづけなくてはならぬかと思ふと全く情なく感じ出したので恁う尋ねた。すると彼等は矢張り默つてゐたが例の紳士は『廣島や。神戸などまちまちらしいんです』と云つてくれた。恁うなつてくると私も何とかしなくてはならぬ。私はそこに僅か許り空いてゐた處を發

見した。それは矢張り誰かの席らしくシーツが敷かれてるし、小さな手提げカバンがその上におかれてあつた。まゝよと許り私はそこに半分だけ腰を下ろした。

この不作法なる一團に對する憎厭の念がむらむらと私の感情を支配して來た。これら不作法な無教育な手あいが日本人の代表としてアメリカ人の間に互してゐるのだ。排日問題が起るのは當り前だ。どう見てもこれが一等國の人民だとは思へない。一體これらの人々が紳士顔して威張つてるのが間違つてゐる。金があるだけが紳士でない。少しは禮儀も心得ろと私は故意にその男の方によりかゝつておむしかけた。この時私一人が光つて見えた。ほんとうに無教育な者は仕方がないなあと思ひ乍ら私は聊か氣取りすぎてゐた。そこに六十許りの和服の人がやつて來た。それが私が占領してゐる座席の優先權者だ。老人は平和な顔して私をみたが、輕くはつはつはと笑つたまゝ立つてゐる。私はずしんと頭から打ち下ろされたやうな氣がした。そして身をつぼめ小さくなつてアリメカ戻りの方にすり寄り乍ら其處をあけて、頭を下げた。老人は顔色一つくづさず、そつとそこに腰を下ろした。むろん僅かに尻をのせただけだ。

私の心は不作法な日本人の代表から、この平和な老人の態度に引きずられて行つた。老人は暫くして懷から小形の冊子を出して讀み初めた。車中の灯は暗かつたが老人の眼は達者だつた。私は見るともなくそれを覗いた。一見してそれが觀音經である事が分つた。

さき頃から少しづゝ參りかけてゐた私の心がぐつたりと頭を下げて了つた。

『貴樣は何と云ふ高慢ちきな男だ。貴樣に人を見る力があるのか』

觀音樣は恁う私を叱りつけた。私は穴へもはいりたい心地して其の座席を立ち上つた。

『どうぞゆつくりかけて下さい』

立ち上つてから老人に頭を下げた。老人は相變らず輕く笑つてゐた。眼を觀音經の上に注いだまゝ。

列車は國府津についた。

□好嫌

子供の時から今日まで變らず好きな花は月見草だ。初夏の川原にぼんやりと咲き出でた樣子は全く堪らなく好い。夕闇がそろそろと迫つて來る頃、夢の樣に咲き出でたあの花を見ると、まるで若い美しい女でも見るやうで、とびつきたい程だ。女なら矢張あゝした女がほしい、ごてごてと白粉をぬつた女など全くいやになつて了ふ。

水の滴るやうに鬢を撫でつけて、とつてつけたやうなぬけ衣紋の長い頸、あつぱれ天下の美人は妾で候然ととり澄した樣子をみると私は胸糞が惡くなるばかりでなく、腹が立つ。だから私は藝者などの今の裝はさつぱり氣に入らない。

嫌なのは梅の花だ、椿の花だ、水仙の花だ。小生意氣にも群芳に先んじて寒と爭ふその事から嫌だ。固い感じがする。强さか迫つてくる。どくどくしい花どもだ。花はしぼらしい所に好さがある。柔らかな所に美しさがある。女も又さうだ。

意志の强いと云ふ事はすべての人に必要に違いない。然し私は意志の强い女は嫌だ。男勝りと云うやうな型の女は大嫌だ。よく世の中に良妻賢母と並べ稱せられるが、私の直覺、私の感情はこの二者をはつきり區別して居る。良妻と云へば情味のたつぷりな人、夫の氣に入る女のやうであるし、賢母と云つたら意志の强い、子供の爲になる女のやうに思える。若い間の享樂生活には良妻がほしいし、若しも自分が夭折でもしたら、子供のために賢母がほしいなどゝ勝手な事を考へてみたりする。

昔黑田如水と云ふ人があつた。借錢を返しに來たお客さんに、其の土產の鯛を料理して、骨をすあぶらせたえらい人だ。豪い人だから私共はその人の事を修身で敎はつた。讀方の本でも讀んだ。人のせぬ事をせぬからたしかにすぐれた人に違いない。『まさかの折に用たてる爲に恁うして平常は儉約するのです。その金はどうかお持歸り下さい』と見榮をきつたらしい。

その男も元來金を借る人だつたから、あまり豪くなかつたとみえて三拜九拜おしいただいて嬉し涙をこぼしたらしい。先には何ぼ金を返しに來たものだつて、骨をすあぶらせるとは酷いと思つて、むかむかと腹を立てゝ居たらしかつた男だ。何と云ふさもしさだらうと私は悲しく思ふ。

『あゝ、さうですか、では鼻でもかみましよう』と云つて、その札びらで、如水の前で鼻汁でもかんでみせたら痛快だ――さりとてそんな事は私にも出來さうにもない事だが、私には好きな事だ。

私の知人によく似たのが居る。貧乏者の私がよく金をかりに行く。不承無精にかしては呉るゝが、何とかの煩魔顔で、好い顔してかす事は少い。そのものが私共の芝居見物にでも行つた所を見ると、すぐ様、何とか云ふ。不斷は手土産一つ提げて來ぬから、私がそのしみつたれをせめると必ず、『まさかの時』を云々する。なるほど私のやうな物では世は渡れまいが、私はまさかの時よりもその折々を樂しみたい。私は何時死ぬるか分らない。何時死んでも好いだけの生活がしたい。死んで悔の殘らぬ人生を送りたい。ゴンドラではないが生命短かしだ。

今の教育は『まさかの時』のための教育だ。どうしても私には氣に入らない。如水的人材を養成する教育だ。どうしても私には氣に入らない。二宮尊德、報德教、しみつたれみんな私は嫌いだ。

嘘つきほど嫌なものはない。

私はこの頃つくづく世間に嘘つきの多いのを知つた。平氣で嘘をついて他人を困らせ、自分では巧くやつた位に心得てゐる。『何あの男はぼつちやんだ。好い加減に云つとけば好い』位で初めからだます氣で嘘を云ふ。敏感な私にはそれが嘘だと云ふ事が初から分つて居るけれども、爭ふ事の嫌な私は『あゝさうか』と承知して了ふ。そして結局は自分が損をし、自分が迷惑して過すのだ。恐ろしい世の中になつたと思ふ。

そして私共のやうに氣がるに人の云ふ事にも信をおく人間は、やゝもすると輕い男もつと惡く云へば輕薄者と笑はれて、この嘘つきの巧い男どもは、中々しつかりして居ると云はれてゐる。ほんとうに恐ろしい世の中だ。

私は腹の底の知れない事が嫌だ。其の心を知りたいと思つて探りを入れたりする事などは大嫌だ。青竹をわつたやうにさらりさつぱりとした人が好きだ。物分りのよい、人の事にも了解のある人が好きだ。

□作法

ある冬の日某氏を訪ふ。歸へるに際して其の夫人手づから僕の破れ外套をとり後よりかけてくれた。がその際外套の破れた裏が見えて、僕は顏が赧くなつた。更に腕を貫くに當つてメリメリと袖裏のさくる音。顏からは火が出た。

客あり歸へるに際して座蒲團を二つに折る。果然其の座蒲團は細君が苦心慘澹、つぎはぎして拵らへたものであつた。ために裏面はよせぎれの珍品。客も主人たる僕もはつとした。細君の顏には火が出た。

□手紙

十年許り前の事である。その頃賣り出した教育批評家から直筆の手紙を貰つて有頂天になつて喜んだ事がある。心安い二三の友だちにその手紙をみせて得意がつた。それから長い間その手紙を筐底にしまつて准家寶のやうにしてゐたが、年とるにつれて自分の考が變つたのか、それともその評論家が下落したのか、その人がすつかり嫌になつてしまつた、その手紙は何時の間にか尻ふきになつてしまつた。

近頃其の人に折々出逢つて、何んだかすまぬ事をしたと云うやうな氣もするが、惜しい事をしたと云ふ氣は起らぬ。

私は育てられた伯父の感化からか、若い時からよく手紙を保存したものだ。伯父は

古手紙を山のやうに積んでゐた。その手紙に貼布されてゐた切手をはぎとつて襖を貼つてゐた位だ――一等大切にしまつてゐたのは勿論戀文だつた。幾人かの異性から貰、つた手紙を二束も三束も柳行李の奥深くしまい込んでゐた。何れ一度はかいて見たいと思ふものゝ材料にしようと云ふ考へから丁寧に保存してゐた。が然しとうとうそれもなくして了つた。

それ等の戀が破れて、そして又新らしい異性が私の頭を占有し、とうとう結婚と云ふ事になつた時、私はその手紙を燒いて了つた。女の熱い情が灰燼となつて行くのを眺めて、私の眼から熱いものが滴つた。今になつて思ふと、こればかりは惜しい。時折細君に向つて、『あの手紙をとつとけばよかつた』

と云ふと、細君は

『ほんとにねえ』と答へる。答へるけれど矢張り顏の色が本物でない。

十七の年に准教員をつとめる事になつた。その時二個年間の教養を受けた合志義塾の塾長工藤先生から頂いた手紙が、今以て扁額になつて私の貧しい書齋を飾つてゐる。子供の時から私は手紙を保存するくせがあつたのだ。

同じ年に、行く行くは夫婦になる女だらうと夢のやうに思つてゐた女が、私には無斷で嫁ぐと云ふ話をきいた。その話をきいた時に赧くなつて問ひ合せの手紙を出した――弱い私の事だから詰問するやうな事は出來なかつた。恐る恐る伺ひたてたやうなものだつたらう。――事がある。その返事の手紙と云ふものも今だに保存されて居る。これらは近く私のかくものゝ中に何んとか云ふ形で表はされるだらう。

十數年の長い交友の間に往復した手紙、たとへ一片の葉書たりとも一枚もすてずに全部保存してゐるのはKからのものばかりだ。Kの手紙は何時も濕ひがあつて懷しい。どうしてもすてる氣になれぬ。

手紙も先方で保存されるなどと思ふとどうもうつかりかけぬ。まさか僕等の手紙を保存するようなお目出度い人もあるまいと思ふけれど、多い中には又どんな物ずきな

人があるかも知れないから。然しさう思つてかく手紙と云ふものは矢張改つてゐて鹿爪らしいものになる。手紙に尤も尊い眞情の流露と云ふものがない事になるので味がない。現代の大家の中では自分の手紙が保存されるのを恐れて、わざと用箋にペンの走りがきで、すます人が多いさうだ。然し毛筆なら保存するがペン書なら保存しないと言ふ事はない。現に私の手許にあるもの〻中で、現代第一流の思想家、經濟學者として持て囃されて居る某博士の片信がある。その文面は例の金談で『家が作りたいから金がほしい』とある。こんなのは保存されても御迷惑と思ふが、その迷惑がらるゝ所にこつちの興味があるのだからたちが惡い。

少し名が世間的に知れると、あちこちの青年たちから手紙がくるものだ。私如きですら度々さうした例がある。が然し此の頃は向うでもズルイ手あいが多い。二三回先生先生と如何にも共鳴したやうな感心したやうな手紙をよこしてウンと持ちあげ、もうよからうと思ふ頃になると『時に先生と來る』度々の事ではあるし『ハヽア奴さんお出なさつたな』と別段氣にならぬが、その先は屹度御難題に落ちて行く。やれ本をかいたから出版の世話をしてくれだとか。やれ上京したいから教員の口を探してくれだとか、やれ原稿を發表してくれだとか。それも好い、それも好いが、それに對して色よい返事をせぬが最後、その後はウンともスンとも云つて來ない。これを稱して現代式と申すのだらう。

近頃流行の某々氏は、地方青年から澤山の手紙がくると云ふ事を非常にお得意の態にみえる。

『まあ君、地方の人たちへ出す手紙の郵税ばかりも月に十五圓は入るからね』

とさもほこりげに話されるのをきくと、何んとか云ふ女の雜誌を出して、よく女の會に押しかけて演說に行く某氏の事を思ひ出しておかしくてならない。その人などは、演說の中途で必ず地方の女から來た自分への感謝狀や、崇拜的の參らせ候を、お得意に朗讀して大向をアッと云はせるのがハコだ。この頃はやる新聞廣告によくある

藥のきいた僞禮狀そつくりだ。これも現代式かな。

未見の人と文通するのは樂しい事の一つだ。文通がしげくなると逢つてみたいと思ふ。が逢はぬ方が好い。逢つたら八分までは失望する事が多い。ことに女の友に於てさうだ。

自分では餘程碎けてゐるつもりだ。平民的なつもりだが、それでも未見の人から『君』と呼びかけられるとギョッとする。だからつて『先生々々』と崇め上げられるのも少し變だ。矢張り『あなた』が一番好い感じだ。

手紙を書くのは一個の趣味だ。すきなものにとつては五六本の手紙を飛ばす事は何の苦もないが嫌なものにとつては、はがき一枚だつて臆劫だ。

私の知人中にも三日とおかず手紙をくれるものがあるが一年に一回くれるかくれぬものもある。それかと云つて交友の親疎は手紙では計れない。年に一度の文通者も感激した時には突として六錢も九錢も貼つたのをよこす。そして數年越しの溜飲をさげる事がある。

好きでかく手紙には濕ひがある。然かし世の中が世知辛くなるにつれて手紙も簡單になつて行く。私も此の頃では殆んど用向きだけの手紙をかくやうになつた。そして自分自らつくづくとあつけなく思つてゐる。よほどの感激でもなければ長い手紙はかけぬ。

よく手紙をかく人は大抵成功する人だ。之は德富蘇峰氏の言葉だつたと記憶する。

殿と書かれたのは嫌だ。私は公文書以外には滅多に殿とかゝぬ。

殿は冷たい、樣は暖い。

貰つて嬉しいのは知友からのよせ書きだ。二三の友だちが集つて一筆づゝかいた一錢五厘のはがきがどれ程の價値あるものに思へるか分らない。

氣持の惡いのは無心の手紙だ。『さて』甚だ申上兼ね云々と來るともうすつかり嫌になつて了ふ。その癖、自分でも折々無心の手紙をかく。書くが其の時許り心を痛める

事はない。いろいろと心を碎いて先方に惡い感じを抱かせまいと苦心する。前置を長たらしく書いて、さてと急轉直下するやり口は、その刹那に於て全く嫌になつて、反故籠にでもまるめ込みたい氣になる自分自身の心理からして、私は金談などを書く時には前置なしに唐突に、

金壹百圓也。

右何々の爲云々と云ふ風にかく。そして讀過の間に於て先方に想像を廻す餘地のないやうにする。そして後から後からと氣分を柔げる式に出る。これは私の論法だ。

手紙に雅號だけかくのは私は嫌だ。餘程懇意な間柄で、お互にその手蹟をよく知りつくしてゐるなら別だが、餘り親密でない間の往復に只だ名ばかりのものや、雅號ばかりのものがある。廣い世の中には同名同姓のものすら決して少くない。手紙には必ず住所氏名を明記してほしいと思ふ。

保存したり、或は後年書簡集に收めたりするには好いかも知れぬが、例の上手な草體日本式な手紙にも閉口だ。私共は文字のくずし方すら錄に知らない。それにもつて來て餘り上手にかゝれた手紙はよむに骨が折れて仕樣がない。忙しい世の中には禁物だ。字の上手下手の標準はどこにあるか知らぬが、一般によみにくい字をかく人は、私の分類法によれば下手に屬する事になる、かく云ふ私自身の字はほんものゝ下手で讀みにくいのだから仕末が惡い事だらう。恐縮な事だ。

『新らしい手紙の書方』とか『何々書簡集』とか『尺牘集』とかを初めとして、手紙で賣り出してるのも可なり多い。加藤子は珍品五てふ手紙の文句で急により有名になつた。

年賀狀廢止の聲も可なり長いが、さつぱり實現されさうにない。年末になつて態々『來年は賀狀をやめます』と御叮嚀に通知を出す人も多い世の中だ。

私は年賀狀を出す事に趣味をもつものである。年賀狀をやりとりしないなら何年と云ふ長い間つい一度も文通せずに、はては居所すらも御互に忘れて了ふ程度の人も隨

分多い。

年賀狀も文切型の恭賀新年じや面白くない。矢張り此機會を以て何か近況を報ずるなりしたいものと思ふ。さりとて正月早々からくどくどしい宣傳文を叩きつけらるゝのも面白くない。

肉筆の賀狀を喜ぶ人もあるが、私は肉筆には失望する。それともなにか變つた字でもかく人なら別だが、いつもみる下手な字で賀正などかいた字は全く見る氣はしない。賀狀は矢張り其の人の趣味を表はすものだ。記さるべき文句は元より、その印刷の形式なり何かについて多少の意匠をこらされたものでありたい。

賀狀廢正は消極論だ。あれを有意義に利用して行く事を考へるが好い。この頃は賀狀を利用して廣告する事が流行つて來た。商人の廣告は最もな話だが素人が麗々しく自家廣告をするのも多い。これも現代式かね。

□年齢

十七八の頃から三十になるまで位。私は常に早く年をとりたいと思つて居た。殊に學校を出た當座など年がとりたくてならなかつた。また一つ年をとつたなどと云つて淋しがる中年の人の心を笑つてゐた。いくら勝れた頭をもつてゐても、どれ程さえた力があつても年が若いと云ふ事の爲に、一向用いられぬ事のみ多い田舍の教育界に於ては、年功程力强いものはないのだから、私が年とりたく思つたのも無理はない。年さえとれば月給が上るのだから、年さへとれば校長になれるのだから……。

この頃よく始めて出逢ふ人々から、あなたはもう少し年の行つた方と思つた。全く豫想に反したと云はれる事が多い。それは嬉しい事だが矢張り一種の淋し味が伴ふものだ。『お前はまだ小僧だな』と云はれてるのぢやないかと邪推してみたりして。

然し私はもう早く年とりたいなどゝ思はぬやうになつた。若くしてゐたい。だから

若く見らるゝのは腹のたつた事ではない。

□ 愚哉！愚哉！

昔、漢學の大先生があつた。或時魚屋が裏口を訪れたのを睥睨して先生のたまはく。

『魚賣人々々々、其價幾何哉。』

と。魚屋は鳩が豆鐵砲でも喰つたようにきよとんとしてゐると、先生ますます得意になつて其の、ギョバイニンをくりかへした。

『へえ』

と魚屋はもみ手をして居た手で頭をかき乍ら頻りにペコペコするばかり、大先生ぐつとそり身になり。

『嗚呼、愚哉、愚哉！』

とやつて引き込んだ。

魚屋はあつけにとられて

『何だい。馬鹿にしくさる』

と思つたが、實は何が何だか薩ぱり分らない。何とか云つたけ、さう『ギョバイニン……ギョバイニン』とか云つたな、苦心慘膽彼は其の言葉をくりかへしてみた。

翌日再び彼は先生の御門を訪れた。恐懼三拜して戸を叩くと例の大先生、又かと許り、

『魚賣人、々々々、其價幾何哉。』

と來た。魚屋はすかさず野聲をはり上げて曰く。

『天上玄』

『え』

『天上玄』

『え何だ』

大先生頻りに首を傾けたが子曰くの中にはそう云ふ言葉はなかつた。困つた事を云ふ奴だと子指の先で一寸、頭をかく。と、魚屋早速、籠をひつかつぎ様、

『あゝ愚哉、愚なる哉』

これは一場の笑話に過ぎない。然し乍らこれを笑話として聞き流して居る人でも自ら深く省みる時、この話が有する或るものに逢着するであらう。『其價幾何哉』は分つても『天上玄』は分らない學者先生は隨分と多いから。

世の中の大先生に知らせる。御自分の云つて居る事の外にもまだ好い事を知つて居るものもあるものだ。

□ 文士及び新聞記者

或會合の席上で、某貴族院議員は、文士及び新聞記者の生活が如何にもだらしない事を指摘した上に更に聲を高くして云つた。『彼等は實に恐面(こはもて)がするのだ。世人は彼等をげじげじの如く嫌つてゐる』と云ひ放つた。

居合せた多くの人々は心祕かに痛快を叫んだ。然かし又囁くものもあつた。

『それはさう云ふ時代もあつた。然し今日は早やさうではない』

『單に外面的な觀察にすぎない。彼等が此の如き生活をするに至れる止み難き內心の惱みに就て、今少し內面的の洞察をしなければならぬ』

中には自ら文士なるが故にとて立つて辯駁した人もあつた。

私は某氏の云ふ事にも痛快がつたが、又人々の囁きにも共鳴した。

私は過去に於て樣々な惡德記者を知つて居た。又いかにも放埒な文士の生活振りも知つて居た。然かし現在に於て嚴肅な新聞記者の二三に就て又かなりよい諒解をもつてゐた、又藝術に携はる人々の近代人的な惱みにもかなり諒解する事が出來てゐたので——。

私は私自身が筆を採つて生活する職業に携はつてゐるだけに、所謂文士及び新聞記者と隣あつてゐると云はねばならぬ、のみならず私は嘗て自ら文學者たらんと希ひ、又新聞記者たらん事を希ふた。それ等の關係からして私は文士及び新聞記者に對しては常に同情的な態度でゐた。然しこの際私は矢張り某氏の云つた事に深く心ひかるゝ。

倉田百三氏は其の著『愛と認識との出發』に文壇への批難と題する一篇を掲げて文士の生活をしたゝかに剔つた。愛を其の守り本尊とする文士たちが、只だ其の作品に於てのみ愛をとり使ふて、實行の上に何等實現する事なきを嗤つた。彼等の多くが只だ刹那々々の刺戟を追ふて放縱な生活に耽溺する事も指摘した。

誠に文士なるが故に世人は之を默視してゐる。姦通野合、勝手たる可き放埒な生活が單に文士なるが故に許されようか。社會と自己の心とに恐れ戰きつゝ犯す罪はまだ可愛いが、洒々として俺は文士だからと云つた樣な態度をして居るのは誠に小面憎い。

東宮殿下の御外遊を期として新聞記者は著しく宮中に接近する事を許された。吾等はこの擧を大いに喜ぶものである。彼等が宮中に接近する事はとりも直さず吾々國民が接近する事なのだ。新聞記者の特權は一に民衆に傳へるが故にのみ存する、彼等はこの事を忘れてはならぬ。自己の背後に民衆のある事を思はなくてはならぬ。大新聞程、勢力のあると云ふのは要するに其の背後にある讀者卽ち民衆の數が多いからだ。

故に彼等は之の特權を苟も私してはならぬ。報導の義務は實に宰相が國政を見るのそれにも等しい。

頃者東京瓦斯會社の事件が世上に暴露されるにつれて、私は顰蹙せざるを得ない事件に逢着した、それは都下の各新聞記者――殆んど大新聞の總てと云つても好い程の新聞社の記者が、夫々瓦斯會社の醜事を筆にせぬ樣に、口止料としてか若干宛の金を懷にしたと云ふ事が傳へられた事である。これは實に新聞記者としての特權を私したものと云はねばならぬ。彼等は何が故にかゝる不正の金を懷にする特權あるや、然か

も此の如き不快の事象に對して世人は大抵沈默してゐる。『新聞記者なるが故に』だ。

あゝ文士なるが故に、新聞記者なるが故に！

文士も新聞記者も總ては人だ。社會人だ。其の非行が社會に及ぼす害毒は決して鮮少ではない。むしろ彼等は世間の眼につき易い處にあるが故に、其の害は却つて多いと云はねばならぬ。田舍の一教員が誤つて陷つた戀愛事件などに比べて、はるかに、はるかに。

デモクラシーが高調さるゝにつれて、ブルジョア征伐の聲が高くなつた。官僚や富豪にのみ惠まるゝ特權のある筈はないと云ふ事を人々はやゝ明かに意識して來た。この理はこゝにも當然適用さる可きだ。文士や新聞記者にのみ特權の存在する筈はない。吾等は凡て平等なる人だ。一の特權階級を承認する事は出來ない。

すべての人がたゞ人としての、純な美くしい心を持つて扶け合ふ日の來るのをまつ。職業や地位や富やによつて人間に差等のつけらるゝのは悲しい事だ。

□ 結構、非結構

一

窓を走る秋の懷かしい事よ。ぽかりと暖かい小春陽に照らされた松原の氣持よさよ。色づいた芝生のところどころ、小さなまつ白い梅ばちさうの花の可憐さよ。

紅葉した林、常綠樹に絡む黃葉の蔓草、その一葉〳〵に暖かいキッスでも與へたい樣な秋の郊外、この長閑さに小半日をねころんですごしたいものだと云ふ心が、犇々とその小旅行者の胸に湧いて來た。

田舍にゐれば雜閙の都を戀し、都にゐればこの靜かな田園を懷しむ、こゝにも私の二元的な心がある。この二つの異つた心を充すために私は度々郊外に住居つて市內へ仕事をしたらなどブルジョア式な考へを起す事がある。

二元のバランスはたへずくりかへされるが、それを統一したいとの要求は更に根强

く私の心の奥に秘む。

二

人工の美――所謂日光の結構を素通して山の秋を探る。大谷川に沿ふた滿山の紅葉は生じつか私の萬年ペンでは表現しきれない。峰から巒、谷から溪へと淡黄から眞紅へまでの幾十階をもつた彩どりは、いかに偉大な藝術の大天才が出現しても之を描く事は出來まい。其の雄大な景圖はとてもカンバスに收まるものではあるまい。右に聳つ巒の紅葉、左にそゝり立つ岩壁の紅葉、谷を越えて向ふに照る紅葉、幾度立ち停つて之を嘆美しても嘆美しきれない。土地は清爽で大氣はほんのりと暖い。誰しもうつとりとなつて見とれざるを得ない。

『どうだ君、これこそ結構だな』

『完くだ』

同行の諸君にもそれに異存はなかつた。

人間共の少さな巧が、果してどれ程まで結構であらうか、私は此の清められた感覺が俗惡な人工藝術の爲めに汚される事をおそれて、明日も日光を割愛しようかとまで思つた。

馬返しから先、中禪寺迄は約二里程右へ左へと山をよぢのぼるのであるが贅澤者には人俥も行くには行く。二里に五圓も拂つたら好いだらうがさうまでして自然の美を弄ぶ必要はない。車上の人々は物好きな、みせつけがましいブルジョアにすぎない。

三

出發がおそかつたために馬返しから中禪寺までの三分の一里程、方等般若二瀧を見るあたりへくると、もう山路は暗くなつた。蔦屋旅館から迎いにきた男の提灯をともして登つた。くらがりの山路を高らかに歌いながら下つてくる學生の群もあつた。杖にすがつて喘ぎ乍らのぼる老人もあつた。山の秋は今が丁度いゝと云ふのだつた。

流石に誇らしい山のながめもくれて了へば何とも仕様はない。一行は靜まり返つて

コツコツと登つた。月もない夜の山路は全く足許さへ見へない。只小さな提灯の光をたよりに山をのぼりに登つた、登つて見れば案外に道は近かつた。糧々と左に華嚴の瀧音をきゝながら、平坦な林をぬけて中禪寺についたが、まつくらで湖の面すら見えない。

人々はこの夜道の割合にらくで、速いと云ふ事を悟つた。左顧右眄する事のない目的への驀進は、なるほど割に早い。もしも人々が只だ目的へと急ぐなら夜道をするに限る。

然し乍ら人生はエンドよりもプロセスだ、たゞ一氣に駈け登つた人生の行程のいかに淋しく空粗なる事よ。こし方を顧みてそこに何等の思出もない馬車馬式な生一本の道の淋しさよ。旅すれば旅に、學校に入れば學校に、夫々其の行先――目的にのみ急ぐ日本人の生き方は私はきらいだ。とにもかくにも試驗をパスすればいゝ、卒業すればいゝ、目的地に達すればいゝ人々の如何に多い事よ。

あゝ淋しき空ろなる人生の旅行者よ。

四

山上とも思へぬ宏大な三層の樓上に、湖の鮭を愛でつゝ低酌に旅の疲を休めた。山の夜は流石に淋しかつた。

『Sは居らぬのかな』

『これ位旅館があればゐてもよささうなものだが』

『私共は持ち運びさへすればいゝのですよ。お酌するのじやありませんから一人で結構です』

女中のお房さんがさう云つて揶揄つたので、誰かゞ俄にSがほしくなつてきた、然しこの懷かしい自然の懷に抱かれてゐる旅人の心を汚させまいとてか、其の要求はとても充されぬ事どもであつた。宿に着く毎に男はそこの女中がどんな女であるかを思ふ。若い女性であつてくれ、愛嬌ものであつてくれと希ふ。そして其の希望に適つた

女がゐるとほつと許り淡い滿足をおぼえる。

若しキリストの様な嚴肅なものに云はせたらこれも罪惡の一つと數へるかも知れない。然し近代の人々は皆さうした心を以て居る。謹嚴らしい鹿爪らしい顏をした人々も、遠く離れた旅の一夜に、若い女性を見る事は矢張り何となく好い心持だらう。此が家から解放された心の縱な姿だ。あゝ解放せられたる旅の心！

十月半と云ふに山の秋は身にしみる程寒かつた。二三杯の酒に陶然と醉ふた私は、かさね蒲團の下にごろりと長閑な夢を結んだ。

酒の眠は必ず私を早くさまします。さめるとしとしとゝ咽ぶやうな雨の音が枕に通ふて來た。湖面を叩くのだらう。

その音は多感な男の腸にしみる様な淋しさをもつてゐた。私は又しても不思議な自分の性格を考へた。

『子供のために』これが私の生活の大部分を支配してゐる。子供の可愛さと子供の生長とを樂む私はほんとうにいゝ御父様なのだ。こし方の長い年月うきめをみせた母をいたはる心と、虐げられた地上の女性を尊敬するために自分の妻を愛する心との強い私は、ほんとうにいゝ主人であり、おとなしいやさしい家思いの男なのだ。それに子供も家人も妻も居ない旅の一夜を——そして若い女性をみて淡い快さを覺える。これが人生のほんとうの相なのか？

私は矢張りこゝにも二つの相對立する心のある事を思ふ。

五

雨にあけた山上の朝ぼらけは、又ひとしほの淋しさと靜けさを以てゐた。薄絹のブエールもて覆ふはれた湖は、旅人の切ない心に逆いて次第次第に煉乳の如き朝霧の底に隱れて了つた。

私等は舟によつて湖を渡らうと云ふ初の計劃をすてゝ湖畔にそうた中禪寺と云ふ立

木觀音のある御寺へ辿つた。湖尻から切つて落さるゝ大谷川の源、そこに架された橋板を渡るとすぐにしめやかな朝の雨にぬれた大陸風の森林が續いた。おほしだ、みづぐさ、山うつぎ、しらかんば、さるなめ、つたうるし、くろぶなど、植物學の知識の乏しい私には珍らしい樹がすつくと立ち並んでゐた。殊に白樺のあのすべつこい樹幹と、落葉した梢の樣子はたまらなく私をひつ捉へた。私は度々Kから白樺の林の事をきかされて、どんな樹だらうと懷かしく思つてゐたが、ほんとうに感じの好い樹だつすた。私は一行におくれてそつとその樹幹に抱きついてみた。そして頰を其の皮にりつけてみた。幹は朝の雨にぬれて冷たかつた。右からはさゝやかな湖の小波が咽んできた。下には落葉がかすかにその自然の味にとんだ匂を放つてゐた、落葉を踏む靴の輕さ。私は靴もくつしたも脱いて其の落葉を踏みたかつた。

一面に生い茂つた熊笹の葉がかさ〳〵とすれあつて、懷しい呼を洩すと、すた、すたと雨雫が落ちる。靜かな中に何か知ら大きな自然の聲をきくような氣がした。林と湖と落葉とそこに僅かにさして來た陽の光とが無聲の交響樂を初めてゐるようで、私の足は停りがちであつた。止まつた私はそこに何かの聲をきこうと耳をすました。林の梢をぬけて朝ぎりは夢の如く流れた、そして私は感覺を通さずに、そこに、呼く自然の莊嚴な調をきゝしんだ。あゝ莊嚴な自然！。中禪寺にある立木觀音と云ふのは、一千年前、桂の立木に刻んだものださうな、一丈八尺の立像、四十八本の手を有する佛像を旅人は五錢の拜觀料を投じて拜んだが矢張り感銘はうすい。

六

中禪寺に行つて華嚴をみずして歸へる馬鹿はあるまいが濃霧のために一寸先もみえないのにはどうする事も出來なかつた。たゞ其の濃霧の奥に轟きわたる瀧音をきいて山を下りる事にした。

どこの山路にでもある事だ。左へ右へと迂廻する所には必ず其の本道の間を縫ふて近道があるものだ。こゝにも其の近道がある。その近道を通れば慥かに半分は近い。

然かし多少の危險があるためかそこゝに柵を造つたり、針金を引つぱつたりして間道を通る人をふせいである。せつかちな旅人――私は其の間道を一勢にかけ下つた、電光形になつたつゞら折なせる山路を一直線につきぬいて行く間道、そこには全く多少の危險もあつた。然し私は其の危險を冒す事の娯を有してゐた。かけ下つて眺めのいゝ茶店で澁茶をすゝり乍ら、喘ぎ〳〵後れてくる一行のものを迎へるのは若い私にとつて矢張り面白い遊戯だつた。急がば廻れと云ふ安全第一の標語もある。こつこつと踏みしめて行く人生の成功者も、私にはよくその心持は分る。然し私は自分の人生をさうした安全第一のものにしたくない。多少の危險を冒して之を敢行する事の勇氣と覇氣とに生くる。安き道をとつてもそこに危險が突發せぬとは限られぬ。十全の注意を拂つて然る後に起つた災害は何とも致し方はない。つとめて安易を求むる心は老人のそれだ。保守黨の心だ。私は若い潑溂たる道行がしたい。

これは必ずしも目的へ急ぐ心ではない。その波瀾重疊の行路に伴ふ快さを味ひたさがあるのだ、平担な道はまことに平凡を意味する。平凡な道は眠を催すものだ。

七

金光燦爛、眼を眩する許りと云ふ言葉は、日光陽明門のために作られたものかも知れない、日暮門とは誰が云つた。

あの黄金を一々剝ぎとつて、金にしたら幾何位あるだらう。どうしてこんな金をあつめたものかなあ、隨分な無理もした事だらう。それはとにかくこの一割でもいゝから俺にくれないかなあ。そしたらあれをかつて、あれを求めて、あゝして恁ふして……などと考へてゐたら或は門の前で日がくれるかも知れない。

『何だ、日暮門とはそんな意味で云ふのじやない』と云ふのか。それは俺にも分つて居るが金光燦爛のために藝術の眞價と云ふ物は却つて害はれてゐるのではないか。私は彫刻や建築に對する審美眼をもたぬから、その建築を彼是と批評する事は出來ないが、何だか恁うこゝの藝術がこの黄金の爲に冒瀆されてゐるやうな氣がしてならぬ。

これだけの黄金をつかはねばこゝの藝術が發揮されぬならとにかく、一世の名工巨匠を集めて築かれたこの陽明門に、これ程の黄金が矢張り必要なのか。

なる程それは藝術に目のない俗集を眩惑するのには好いかも知れない。然しそれならば富の力さへあれば何時の世、誰れにでも出來る事のみだ。

世に金ぴかを身に着飾つて自分の優越を誇示しようとする官吏と云ふものがある。私は風呂にはいつてゐる時に於てのみ初めて人の眞値が分るような氣がする。金ピカにたよらなくては自己の價格が分らぬようでは實に情ない話だ。

裸になれ！裸でえらくみゑる人のみがほんとうにえらいのだ。一人九十錢も貪りつて見せぶらかす日光廟は俗の俗だ。誰か之を結構と云つた。

よく汽車の中などで田舍の成金をみるだらう。節くれだつた指にでつかい金の指輪を二本も三本もはめて、金鎖を胸から腹のあたりへまでピカつかせ、金緣眼鏡をかけて之れみよがしに振舞つてゐる男をね。偶々それが口をあけるとクワツト計り火焔でも吐いたかと思はると云ふやうにズラリと金の入齒をしてゐると云ふ奴をね、日光の結構と云ふのはまさしくその田舍成金を見るやうな物だ。

□　學者——大學教授

石原純博士の戀愛問題が發表されてから引續いて、後藤、工藤二學士——何れも大學の助教授——の閨門に關する忌はしい事件が傳へられた。初めの內は世間の論調何れもその當時者に同情するが如く見えた。同情する人々は云つた。『彼は世界的學者である。戀愛の一些事を以て之を葬るは惜しい』『彼は何々學の權威だ、今彼を大學より失ふのは惜しい』と。其の人の學才を惜むが故に其の非行を默視する法はない。由來我國にはこのような考へが強い。藤公を許す人々の心もそれだ。然し乍ら學界への貢獻は貢獻として稱へても好い。其の非行に對する非難は非難として當然受けなければならぬ。僅か許りの學問や。大學と云ふ隱れ家の下に隱れてこの非難を遁れようとす

る心の卑しさをみよ。

私は度々傳へられる小學教員の戀愛事件に就てのみ、何故に世人がかくやかましいかを怪しむ。彼等の中には彼等が占むる位置に於ては、又相當の有爲の士があるかも知れない。然し乍ら彼等の非行が一度傳へらるゝと、一たまりもなく馘られて了ふ。そこに何等の隱れ家もない。この事實は實に弱者に對する態度がいかに苛酷であるかを語るものである。私は『何々なるが故に』と云ふ考を兩者からとり去る事を希望する。何れの職業、何れの地位にある人もいかなる學説、如何なる技術ある人もその受く可き非難は正しく受く可きだ。特に弱きものに對してのみ苛酷なる理由は決して許さるゝ筈はない。

功績を以て其の罪科を帳消にしようとする考は、とかく世間をごまかすものだ。功績は功績として之を認むるが好い。罪科は罪科として之を詰るがいゝ。

學藝に秀でたるが故にその罪過を許す事が正しくないと共に、罪過の爲に其の優秀の學藝を葬むるのも正しくない。

□　教員の頭

自由教育、衝動滿足論、改造云々。八大教育云々。教育界にも花が咲いた。見事な物だ『もう新らしい事を云ふのはよしてくれ、ほんとうに吾々を助けると思つて、止してほしい』これは或教員の悲鳴的告白だ。次から次と出てくる新説に對して、一々吟味する事はたまつたもんじやない。さりとて風馬牛でゐれば老朽だの若朽だのとつちめらるゝ、あゝあゝとんだ事になつたと云ふのだ。

なる程氣の毒な事だ。

さう云ふ頭の持主にとつて最もいゝ、お供物がある。現代の教育新思潮を一網打盡にしたたつた一冊の本だ。曰く八大教育思潮、又曰く、改造的教育思潮批判、又曰く教育思潮大觀。とりどりに立派な人々の作だし、誠に調方なものだ。就中批判まで添へ

られたものになると、もう此の上なしだ。あらゆる說の大要を知り、その上にもつて來て其の說のよしあしをまで敎へて貰へるのだから。

そこで、それ等の書物はまさに大旱の雲霓と云ふわけだ。私は長い間敎員生活をしてゐて、その忙しい事も知つてゐる。でこれらの調法な物を大いにおすゝめする。これ等を讀んで早く其の大要でも知つてほしい。

だが一寸待つて貰いたい。

諸君は其の御供物で甘んずる事が出來るか。

ある人は八大敎育とか云ふものゝ外にプロゼクト、メソッドを加へて九つ、これが新思潮の全部だと云つたとか、ところが十大敎育主義と云ふ物が別にある。これを見たらォヤ〳〵と思ふだらう。そこに又敎員泣かせの徒ら物が出て來て十二、十三の新しい主義主張をもち出して、どんどんぶか〳〵と騷ぎたてたらどうする。

そんな事はどうでもいゝとして、一人の批評、一人の批判に甘んじ五十頁や六十頁の紹介で足れりとして『天下の敎育思潮悉く了解し終つたり』てな顏だけは止して貰いたい。之は何もさう云ふ立派な著書をくさす理ではない）供へられたもの、盛られたるものだけで、一かど研究しつくしたつもりの顏してゐては、主義學說に對して誠に申譯のない事だ。カント一人の研究に一生も二生もかゝつて居る學者もある。一派の主義學說を創建しようと云ふほどの人は、その本質に於てカントにも劣らない人にちがいない、勿論其の深奧な所はその御本人すら分るまいが。私は多くの研究者達が長く共々にその深奧を探る態度ですゝみたいと思ふ。

×

人の云はぬ事を云つて得意とする心持は誰にもある。又みんなの人が右する時に自分だけ左して得意とする心持もある。

近頃、私は地方から出て來た人を東京驛で迎へた。その人は私にいきなりきいて云ふ。

『オイ君千葉師範は見るがえゝか、みないがえゝか』
『それはどう云ふ意味かね』
『大分評判が惡いが見るだけの價値があるかね』
『千葉を見ないでどこを見るかい』
『さうかね』
『そうかねた何だ』
『はつは――』

その人の云ふには、ちか頃土地の新聞などに千葉師範の參觀記などが出るが、餘りよく書いてないのだ。それでどうかと思つて居ると云ふのだ。なる程もつともな事だ。

私も千葉師範がさして見事だとは思はぬが、東京へ着ても差してみる可き學校もないから『まあ千葉へ行き給へ』と云はずにはゐられない。見に行つた人は大抵は三四分通りの失望と六七分の滿足を以て歸るらしい。然し自分で少し筆でも廻る程の人は『何千葉師範見るに足らず』てな事をすぐに書き立てる。其のクセ自分はなにもやつてゐないのが多い。俺だつてあれくらいな事ならと云ふ心持だらふ。とかく人をくさして自分をエライ物にしようとするのは世の常だ。

思ひ出した事がある。三五人で演說する時、一等後でやる人が前にしやべつた總ての說を一々とりあげて、さんざんにくさし乃公一人のみ、正しく偉大なりとする人がある。まことに片腹いたい事だが、先辯士に對する失禮も甚だしい物だ。凡そ人氣ものをくさしてとやかく云ふものゝうちには恁ふした考から出るものも多い事をしらねばならぬ。

恁う云へば一燈園をとやかく申さうとした私自身が、自分の堀つた穴におつこちた事になる。どうもうつかりものも云へぬものだ。

□ 肩書その他

ちか頃、ある雑誌が、その執筆者に何々博士△△教授等の肩書をつけてゐるのを事大主義だと云つて批難した人があつた。云ふ人の心は改造などのやうに一切の名士非名士すべての肩書をかなぐりすてゝ一個の人間として押し出せ、そしてその文章、その意見のよしあしによつて批判せよ。肩書などで人をおどしつけるのはよろしくないといふのだらう。

それに對する雑誌側の答辯は、少しまじめを缺いだ處があつたが、自分の雑誌は貧弱だからせめて誇大な廣告でもさせてくれ、それでないとつぶれて了ふと云ふのだつた。それから局外者から肩書贊成の意見が出て、肩書のあるのはその作者のどんな人であるかゝ分つて却ていゝ。殊にそのかいてる事が肩書とふさはぬ時は、全くその人の恥をさらしてゐるやうなもので痛快だと云ふのであつた。

これはどちらにも一理あることである。

これに似た非難は前にもきいた事があつた。殊に著書などに前何々と、前職、前官までも肩書にわりこませて、讀者を釣らうといふのがあるのに對して鬼の首でもとつたやうにがなりたてゝゐた人があつた。なるほど前官までかつぎ出すのは少し變なやうにもある。

私にも教授上の實際問題を取扱つた著書があるが、その本には本屋が勝手に、前……教官てな古い肩書をくつつけて賣り出してゐる。私は一應その事に對して抗議したが、本屋の方ではそれを大して意にもとめず相變らず前何々で廣告してゐる。私は改めて之に抗議する程の勇氣も必要も感ぜず、そのまゝにしてゐる。それは、その方が本屋の方で都合がいゝと云ふのなればそれでもよいと云ふ位に考へてゐるからである。

私はすべての肩書をかなぐりすてた眞裸の人間を愛する。すべての特權から脱脚し

た無位無官の一個人としての人間を愛する。ある特權の陰にかくれて、ことさらに自己の優越を誇らんとする心事の陋劣をにくむものである。――社會主義者といふあるこはもてのする名を利用して、ことさらにプロレタリアがらんとする似而非主義者も同じ意味に於て憎むものである。

昔は清和天皇何代の孫といふ風に、抑の家の起りから名乘りをあげて戰つたといふのんきな話すらある。社會に押し出すのに自分の履歴とも云ふべき一端を表白してお く、事は、決して罪惡ではない。とがむべきはその肩書のこけ威しを以て、世間の目あきめくらを釣らんとする心事である。

釣る人の多きは釣らるゝ愚かものゝ多きを語るものである。世間の人々がすべて肩書など云ふものに眼もくれず、その文章思想に直ちにぶつかつて、思想そのものを評價するに至れば、肩書などはあつてもなくてもその人々には何の差支もない。否却つてあつた方がいゝ位である。卽ちその人の閲歴とその思想とを併せ考ふる點に於て便利であるからである。――なるほど彼は官學の教授なるが故に此の如き學風と思想を有するとか、或は又彼は無位無官なるが故にかく思ひ切つて云へるとか、云ふが如く――。

文壇はその點では一等すゝんでる。誰人も小說や戯曲の署名に肩書を附する人はない。然し世間ではその一々の作者の主義傾向によつて之を類同區別し、評價する。

肩書あるは無精者にとつてやゝ便利である。それはこう云ふ譯だ。

肩書は尙一種の資格の如きものだ。例へば教員免許狀を有するものは大した失敗をせず教員たりうることの證左である如く、何々博士の肩書は大した馬鹿を云はぬものとの相場をきめるものである。無資格教員の中には破天荒にいゝものもあらうが、又一面ではどんな失敗を引き起す人があるかも知れぬ。肩書ある人は大抵水平線に達してゐる。肩書ない人の中には往々水平線よりずつと以下の人がある。やゝもするとそのレベル以下のものをつかませらるゝ。故に文章を味ふ前にまづ肩書によるは、事勿

れ主義をとるものゝ仕業である。

吾々は多くの場合、人を紹介するにその人の出身、官位、職業等を以てする。次にその思想人格に及ぶ。前者は後者を了解せしむるに都合いゝからである。若し前者を云はずして、眞によく後者を了得しうるならばそれに越した事はない。

肩書はあつても惡くはないものである。然し世間は肩書などに拘泥せず直ちにその人の眞價をみるやうにならねばならぬ。その方便としては、まづ暫くすべてのものから肩書をとりさつて裸の競爭をさせてみるがいゝ。その中には肩書なくして、肩書あるものに勝る數等の人が出て來るであらう。そしてそれが刺激になるであらう。肩書あつても案外つまらぬ事を云ふ人も出て來るであらう。そしてそれが物笑ひの種となり、肩書必ずしもアテにならずと云ふ風に至るであらう、さうなればそれはやがて特權階級を否定せんとする一種の社會改造の運動となるのである。

肩書は、自己の責任を明にする必要上からつけておく場合が多い。かゝる際は自ら別問題だ。

×

何物も絶對の價値を有するものはない。

眞珠は尊いものであるが飢の前には一塊の馬齡署に及ばない。

金錢の尊さは何人も之れを知つてゐる。そして何人も亦金ほしと思はぬ人はない。然し日本銀行の金庫の中に締め込まれて、二日三晩ものまず喰はずで、金のうなる冷たい暗い中で、生死の境を彷徨つた人の話によると金などはどうでもよいと云ふ心になるさうだ。

時と場合によつて物には夫々價値がついてくる。

昔、江戸の大火の際一枚の夜具を百兩で買つた賢い男がある。百兩の金に眼眩んで賣つた男は黒煙にむせんで火屑となつて了つたが、買つた男はその爲に煙をさくる事が出來て一命を儲けた。彼は尤もよく物の價値を知つてゐた男であつた。

凍えの前には金塊よりも石炭である。一本の藁屑すら場合によつては非常の役に立つ。

利用の途を知らぬものは何事にも事大主義をふり廻し、世の中を狹くする。人世は見よう考へようによつて樣々だ。何事も餘り窮屈に考へたくないものである。物の價値を單に經濟學の原理から許り考へようとするものも亦愚なるものだ。

相撲や柔道には相手の力を利用して敵を倒す手もある。何も自分に力の乏しいのを絶望しなくともいゝ。力あるは力なきにまさる。然し力乏しく生れついたものはかこつても仕樣はない。惠まれた天分に安んじ、そを磨き之を活用するがいゝ、活用の途開かれゝば相手の力をわがものにする途すら開けてくる。

□ 教育の自由と生活の安定に向つて

一

二十萬人の智識階級を包有する教員の大團體が、若し大同團結して强固なる結束のもとに活動するとしたならば、その力は恐らく目ざましいものがあるであらう。二十萬人の背後にはその兒童と父兄を通して更に一千萬の民衆がある。一千萬人の大衆と共に卿等がその存在を鮮明にするならば、恐らく天下何事かならざるを憂へんだ。天下の正義、社會の公道、一に卿等の手によつて行はれ、人類の進歩、地上の和平、一に卿等の手によつて保たれるであらう。

然しわが親愛なる教員諸君は、毫もその運動を試みないものゝやうである。團結の必要を認めないのか、その必要を感じないのか。それとも眠つてゐるのか、死んでゐ

るのか、あるひは必要を痛感してゐながら手の下せないのか、そんな事をと、てんで問題にしてゐないのか、何れにせよ。まことに悠々安閑たるものである。然も祕かに卿等の生活狀態を一瞥するとき、吾等はそこに樣々な事實――當然卿等が奮起せねばならぬ事實を發見するのである。

二

第一卿等は教育に從事する身であり乍ら、殆んど教育の自由をもたない。卿等のやつてゐる日々の仕事と云ふものは、靈の通つてゐる仕事とも思はれない。教育と云ふものは本質的に考へれば、教師の自由なる人格的活動にまつべきものである。人格的活動といふのは、自分の力で膳立し、自分の力で計劃し、自分の考通りに行ふ事である。人格的活動は器械的活動と區別すべき事だ。工場に於ける職工の仕事は器械的活動だ。器械の力によつて支配せられ、更に技師や、監督に支配せられその命令差圖によつて動くものである。自分の意志自分の靈と云ふものを、その製品の上に加ふる事が出來ない。すべての製品は型の如く作られる。

處が卿等のやつてゐる教育と云ふ仕事は大體に於て、その職工の仕事と似てゐる。本質に於て、根本的に違ふものが、實際の現狀に於ては頗る似てゐる。第一卿等は計劃の自由がない。總ては定められたる事に從つて行ふ。次にそれを行ふにも又制縛がある。卿等は毎日の教授すら檢分せられる。教案と云ふものを提示して校長の捺印したものに從はねばならぬ。更にその上に折々は監視的の參觀を受けその都度何かとお叱言を頂戴する。

訓育に於ても、校訓に從はねばならぬ。その外いろいろやかましい事柄があつて一々卿等の教育行爲を束縛する。制度や組織上の自由が卿等の力によつては絶對に動き得ないと云ふのは、まだしも、日々の仕事たる教育教授その事の自由がないと云ふ事は、何と云ふ悲慘な事だらう。

三

或人は云つた。

教員は教育の制度方面に對しては、よしどんな事があつても手が出せない上に、自分たちの體が四重五重に縛られてゐて、とても堪へ能はぬ。そこで抑へきれぬまでにあるものが胸中に醱酵して來るが、それを洩すべき術がない。やつと一の活路をみつけて逃つて出たのが、例の自由教育だ。僅かに與へられたる方法上にのみ、その自由なる天地を發見して、そこでその鬱積せるものを吐かうと云ふのだ、と。

なるほど面白い觀察である。自由教育は抑へに抑へつけられたものゝ不平の爆發であるとはよく云つたものだ。然しだ。然しその自由教育の研究すら、決して自由ではない。世間の批難がやかましく、自由は教育に非ずなど云ひ出さるゝと、折角雄々しく出發したものもだん〳〵硬化して來て、矢張り理想主義の陰にかくれて了はなくて

はならぬ。

何か在來の型と變つた事をやらうとすればすぐやかましい。一切衝動皆滿足を設けば、公職を退くべく餘儀なくせらるゝ。自由教育を研究せんとすれば知事から差とめを喰ふ。何しろ窮屈千萬な世の中だ。教育界には教育勅語の研究と、カント哲學の研究と報德教位がせい〳〵歡迎されるもので、なか〳〵變つた事の研究は世間も官憲も許してくれない。(尤もこれは教育界そのものゝ古くさゝも手傳つてゐるが。)

研究の自由なく教育の自由をも許されない教員は、まるで器械に等しい。蓄音機代りにしかならぬ。器械や蓄音機によつて、人間の靈に生々たる息ぶきを與へようとする事は誠に滑稽千萬な事である。然もかゝる境地に甘んじなくてはならぬ卿等はほんとうに活ける骸骨の如きものではないか。自己に目ざめ、自己の仕事にはつきりした自覺があるならば、先づ何は措いても、自由の途を求めなくてはならぬのではあるまいか。

四

精神生活に於て、既に卿等は奪はれつくしてゐる。過分の物質でも惠まるゝ處あらばまだ我まんする事が出來よう。がこゝにも亦十二分に虐げられ蹂躙されてゐる。卿等の地位は殆んど確保されてゐない。形式的に文部大臣の指令を受ければ、何時でも首がはねられる。手近に云へば郡視學の手心一つでどんなにもなりうる。奥山への左遷、孤島の流謫、そんな事は朝飯前だ、町議や村有志の鼻息にふれても、首がとんだり、減俸同樣の浮目にあつたりする。

今でこそ小學教員の待遇も平均六十圓位になつてゐるやうだが、これまでには隨分骨折つたものだ。その六十圓も近頃の經濟狀態からすればいくらか好遇のやうにみえる。即ち農村が疲弊し、一般經濟界が不景氣で月給とりが失業する狀況であるから月給の六十圓は、田舍に居れば結構のやうだが、さてそれが果して相當の生活を營み、

子女の教育を十分にする事が出來る程度かと云ふと決してさうではない。文化的生活など思ひもよらぬ願だ。然もそれですらとかく高すぎるなど云ふ批難の聲をきく。分らずやの町村吏員などは、教員を眼の上の仇のやうに思ふて、その俸給の高い事ばかりこぼすと云ふ狀態ではないか。今に教員俸給減退案が出ぬとも限らない。その時はどうしようと云ふのか。

更に少しく眼を社會の大勢に注いでみるがよい。勞働者と資本家の爭議はだん〳〵進んで行つて、天下の形勢はこの二大階級に横斷されようとしてゐる。世界の勞働者が大同團結しようとする形勢は明に之をみることが出來る。そして彼等は飽迄も資本主義と戰ふとしてゐる。資本家から搾取せらるゝ事を極端に忌避してゐる。その結果勞働者の待遇は日一日と向上して行く。彼等のあるものは日本に於てでも優に年收三千圓に及び堂々地方官に匹適するものすらある。熟練工の給料は大學出の技師にも勝る。新聞社では職工の方が記者よりも待遇がいゝことも少くない。

之を獨逸の狀態にみるに、獨逸の俸給生活者殊に忠順なる國家の官吏たちは、勞資二大階級の間にはさまつてまご〳〵してゐる裡に、その待遇がだん〳〵と引き下げられ、戰前に比してみる影もない狀態にまでなつて了つた。卽ち俸給生活者は、最も絞りやすいといふ處からして、資本家は彼等の得るところを打ち削りて之を勞動者の方に廻して了つた。勞働者の得分はどん〳〵上るが、サラリーマンの待遇は日に日に下る一方、とうとう中產階級そのものゝ沒落が唱へらるゝに至つた。そこで初めて官吏——流石に忠順なる官吏も背に腹は代へられず、彼等の仲間を糾合して組合運動を初むるに至つたが、時は既に遲かつた。

この傾向はロシヤに於ては更に甚しい。ロシヤに於ける所謂インテルゲンチヤの悲慘なる末路に就ては、こゝでくり返して云ふもぞつとする程だ。

かくて世界のあらゆる地方に俸給生活者が虐められ、搾られて行く。今にして眼ざめなければ、俸給生活者は全く沒落して了ふに至る事であらう。日本に於てもこの傾向がないとは決して云へない。役人ずきな日本人に、官僚の威張れる日本國に、もういゝ加減、反官僚熱が高まり、役人蔑視の風が昂じて來た。彼等は今の內にちやんと自家擁護の地盤を築いておかねば屹度酷い目に逢ふであらう。

首の座になほるまで、悠々閑々たるか。卿等は世界の趨勢と沒交渉であつては誠に卿等自身のために危險千萬である。

五

思ふにこれ位の事は卿等と雖も十分に知つてゐるであらう。然してどうも手が出ぬと云ふのぢやないかと思ふ。どうして手が出ないのか、それにはいろいろな原因もあらうが、矢張りまだ押し詰つてゐない。どん底までつき詰めて考へてゐない。その日暮しの苟且な平安に甘んじてゐるのだらう。そこに朝露のやうな、うたゝ寢の夢を貪つてゐるのだらう。リーダーがないと云ふ事も大きな理由の一つかも知れない、勝れ

た指導者がゐて、世話をしてくれゝば各地に小團結が出來る。その小團結が全國的に團結する事はさう大して困難ではない。

指導者がないと云ふのは、教員の中にそれ程の力のある人がゐないと云ふことである。力と云ふのはいろいろの事を意味する。熱もあり、知見もあり、度胸もなければならぬ。首ばかり案じてゐる骨なしでは仕方がない。何時でも首をさしのべるだけのはまりがなくてはならぬ。然し考へてみれば組合を作つて生活の安定、教育の自由のために戰ふことは決して危險な事でもなく、不都合な行爲でもない。當り前の事だ。

一體教員が團結しようとするのを、誰がやかましく云ふのか。そんな例があるか。名古屋とか、滋賀とかには一二さうした例もあつたやうにきいてゐるが、そんな時には誰が愚圖々々云つたのか。

小團結は地方殊に田舍から作つて行くがいゝ。何しろこう云ふ事に早く眼ざめるのは都會人だし、都會の方から早く恁うして團體が出來て行くやうだが、そこを早く見越して先づ田舍から郡や部を單位にして團結して行くがいゝ。そしてその力で都會の方も押しきつて行くがいゝ。

小團結を作る場合に之を阻むものは誰か。校長の中にある若干の骨なしもの、上にもねるものがそれだらう。然しそれが誠にさもしい教員根性の發露だ。校長まづ陣頭に立たねばならぬ。校長まづ陣頭に立つより視學先づ率先すべしだ。今日の視學は教師の敵か味方か。思ふに一人一人逢つてその胸中をきいてみれば、必ず教師の味方であらう。否、味方と云ふよりは視學も亦教師そのものだ。視學は一時の變體のみ。視學の中の多くは再び教員に舞ひ戻るものだ。かりの宿りの視學を以て、教員の敵のやうな振舞をするのは以ての外だ。視學は須らく自ら陣頭に立つて教員の團結に力を添ふべきである。少くとも彼等の團結を默つてみて居べきである。それがとりも直さず自分自身を擁護する道である。

六

何時何處の團體にも裏切ものは出來る。殊に教員にはそれが多い、然し多少の犠牲は忍ぶべしだ。誰が犠牲になるか、それは事情によつて一概には云へぬ。一郡又は一郷の中にある校下の全教員、少くとも過半數の教員が、堅く申合せて等しく首をさしのべてゐたら、恐らく何人も之を首にする事は出來まい。思ひきつて手をつなぎ合ふがいゝ。各人は皆自らが犠牲者になる腰でかゝるがいゝ。他人の褌で角力をとるやうな卑しさを止めて、自らが首の座に坐する決心でかゝるがいゝ。一人きればぞろ〳〵とみながつながつて行くやうにしておけばいゝ。そこに初めて結束は固まる。

それは然し、よくよくの事を云つたものだ。教員が教員會を作つて團結する事夫自身は決して間違つた事でもなく、わるい事でもなく、危險な事でもない。それが爲に云々されるやうな事は絶對にありえない筈だ。何も團結して不穩な事をするわけではなく、自分に與へられた範圍に於て教育の自由を獲たいと云ふまでの事だ。自分の得たる職業に對し、その安定を保ちたいと云ふまでの事だ。自分共の仲間が自然に沒落して行かうとするのを未然に防がんとする迄の事だ。それが何で危險だらう、何で惡い事だらう。人間として、教師として當り前の事のみだ。

然し世の中は何事も正義の通ぜぬ事が多い。成果を收める爲にはまづおとなしく出る事だ。研究會の名でもよい。修好團體としてもいゝ。いゝ加減表面を作つてまづ結束を固めておくがいゝ。結束さへ出來て居れば漸々と時機はやつて來る。

何しろ一二の人でもいゝから、ほんとうにやらうと云ふ氣概のある人がでる事だ。勞働ブローカーや、運動費絞りの喰ひつぶしものゝ力を借りずに教員の中から眞劍にやらうと云ふ人の出る事だ。

（生命至上の教育終り）

大正拾貳年七月十二日印刷
大正拾貳年七月十五日發行

生命至上の教育
正價金貳圓

著作者　志垣寛
東京市神田區表神保町七番地
發行者　阪本眞三
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　吉田松次
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

不許複製

發行所
東京市神田區表神保町七番地
振貯金口座東京八七貳番
大同館書店

◇原田實氏新著◇ —（人間の力と光との活動を勵す）—

再版 人間への教育

四六判最上製 美本六百頁
正價金貳圓八拾錢 送料十二錢

世界は人間の心を忘れ人間の姿を見失つて居る。家庭からも學校からも社會からも人間の力と光とが消え失せてゐる。思へば、價値の顚倒を力說して靈魂の貧民を睥睨した哲人の心と自然に躍れと絕叫して外形の奴隸を叱咤した革命家の心とが慕はしい。私は切に人間の心を思ひ人間の姿を想はざるを得ない。この思慕と志向とが本書を書かせたと言へる。私は私達の家庭と學校と社會とは今や「人間への教育」を深く〳〵考へて見なければならぬ一大危局に立つて居るといふことをつく〳〵と思ふ者である（自序の一節）

◇志垣寛氏新著◇ —（青年教育者必讀の要書）—

新刊 弱きものゝ上に（師範生のころ）

四六判最上製 美本四百頁
正價金貳圓 送料十二錢

弱きものゝに上に惠まれた樣々な虐げと呪ひと脅迫のどん底に惱みもがき乍らも尙且つ其の淸く美くしい心を失はなかつた一師範生の雄々しい人生の記錄を見よ。藝術と教育の葛藤・熙辣・諷刺・利己・嫉妬・欺瞞とあらゆる險惡のすがたにむせ返る師範教育の現狀はわが新人の深刻なる描寫によつて遺憾なく暴露された。

◇小林一郎氏新著◇ —（再版亦々賣切三版出來）—

好評五版 奥の細道評釋

四六判最上製美本 金壹册壹百餘頁
金壹圓參拾錢 送料十二錢

旅を以て生命とせる芭蕉翁が奥羽から北陸に亘る半歲に餘れる旅日記なり之を讀む者は宛ら此の俳聖に伴ひて山水の間に放浪するの感無き能はず芭蕉の集中無二の名篇たるのみならず此の種の文としては東西古今一も比肩すべき者無し著者が芭蕉に對する渴仰の意は自ら此の註釋を成せり。未た芭蕉を知らざる者も既に知れる者も共に必ず一讀せざるべからず。

◇小林榮子女史考案◇ —（極彩色十數度刷・優美文字石版刷）—

趣味教育 俳句いろはかるた

特別最上製 壹組箱入
正價 金壹圓八十錢 送料拾八錢

自分の子を出來る丈立派に育て上たいと望まぬ親はありますまい。立派に育て上るのには高尙な趣味を養はせるのが最も大切な條件です。日本は世界に類の少い趣味の國と言はれて居ます俳句は此の國民性を最もよく現はしたものです。私は古來の名句の中から殊に小さい人に適する樣なのを撰み自分の子供に取せて居ました。今度之に繪を添て皆さんに提供するのは皆さんが揃つて立派な人に成て下さるやうと願ふからですそれが皆さん自身の爲でもあり又御國の爲でもあると思ひます。

東京市神田區神保町七 大同館發行 東京振替貯金口座東京八七貳番

◇文學博士　吉田熊次序　市川一郎譯著《現代教育者必讀の要書》

拾壹版

教育の基礎たる哲學

四六判最上製本
全壹冊四百頁
正價貳圓五拾錢
送料十二錢

哲學は難くして常人不理解のものなりと思ふ人多きは從來公にせられたる哲學書の罪である本書は卑俗に流れざる程度に於て最も平明に最新の哲學を系統的に叙述せるもので之れを繙かば哲學的素養の皆無なる人士と雖も易々として現代哲學の概觀を捕捉し健全なる哲學的人生觀教育觀を樹立し得べく以て從來と全く異りたる意義あり價値ある新生命を開拓し得んこと疑なし。

◇市川一郎氏譯著◇《文部省は勅令を以て社會教育課を新設す》

三版

教育の基礎たる社會學

四六判最上製本
全壹冊四百頁
正價金貳圓
送料十二錢

本書は米國碩學の近著に係る應用社會學の一なる教育的社會學に據て社會學の主要なる原理と此原理に立脚する教育說の社會學的解釋とを講述せるものである。過去の因襲教育が心理學に依て改造せられたるが如く、行き詰れる現代の教育は是非共社會學に依て改造されなければならない。實に本書の說く廣大にして根本的なる教育說は狹隘なる天地に蹐踢せる今日の教育を廣濶清朗なる曠野に誘導するものである憂國の士の必讀を要請す。

發兌　東京市神田區表神保町七　大同館書店

早稲田大學文學士　原田實氏新譯◙

七版

エレンケイ女史原著　兒童の世紀

四六判全壹冊
最上製美本
金貳圓五拾錢
送料金十二錢

エレンケイ女史の名は今や全く世界的である。女史の至純なる戀愛を高調し高尚眞面目なる結婚を主張するは何の故ぞ！其間に生る、兒童を眞の人格者たらしめんが爲である兒童を眞の人格者たらしむるは人類を眞の人類たらしめて幸福と平和と悅びとを此世に齎し生命に輝く世界を創造せんが爲めである。そして其第一の又最大の準備として女史の主張するものこそ所謂『兒童の世紀』である。內容は兒童中心の思潮を徹底的に說けるものにして佛のルッソーの『エミール』に次ぐ大名著と稱せられ實に教育社會のみならず一般の歐米人に甚深の印象を與へ今日の教育を導く一の光明となつて居る。譯者は夙に女史の偉大なる思想と人格とに敬服し多年其著作に親炙するもの其敬仰の熱情遂に鼓に女史が代表的著作の全譯となる或は涙に濡れ或は力に輝く其の原文を移植し得て餘す所なし我が思想界教育界邸人界は本書を得て一の至寶を加へたりと謂つべし。

早稲田大學講師　本間久雄氏新著◙

四六判上製
美本全壹冊
正價金貳圓
送料金十二錢

三版

エレンケイ思想眞髓

エレンケイ女史は最も熱烈に戀愛を高調し戀愛中心の結婚を主張し同時に戀愛のない結婚生活に向ふて最も大膽なる自由離婚を主張した人である。女史は性に對して最も大膽なる舊道德の破壞者であり最も熱烈なる新道德の建設者である而してこのエレンケイ女史の思想と人物とを最も平明に最も簡潔に最も味ひ深く書いたものは本書である

東京市神田區表神保町七
大同館發行

●●● デューウィ研究の權威 ●●●

◇永野芳夫先生新著

デューウィ教育學說の研究

◇四六判最上製美本四百餘頁 正價金貳圓 送料十二錢

拾壹版

五年以前から製頭的にデューウィを研究してゐた著者が全ての著書論文を讀破した後ち哲學を背景としながら教育思想を系統づけたその全般的研究の成稿を澤柳博士長田高師教授の二つの推賞のまに公にすることになつたのである。行詰つた今日の教育と教育學に不滿を持つものはデューウィに來れ!! 在來の紹介や飜譯を讀んで未だ釋然悟徹しなかつたものは本書を讀め。

目次

一班

序論哲學的背景…哲學の進歩…第一章教育とは何か…生活としての經驗…廣義の教育…第二章學校教育とは何か…狹義の教育…第三章在來の諸教育說の批判…準備主義の教育…開發主義の教育…第四章教育に於ける目的…第五章方法論…第六章題材論…遊戯及作業…地理及歴史…科學…第七章興味そのほか。

大同館發行圖書目錄

□稲毛詛風氏新著□（著者自信ある感想評論集）

文化と自然

四六判最上製美本金壹册四百頁箱入 正價金貳圓參拾錢 送料十二錢

第貳版

人本主義、文化主義の現代に於て吾々の興味が偏に人生と文化とに傾くのは極めて當然のことである。併しながら人生と文化とは直ちに實在ではない。而も人間の生活は大實在と合一した時にのみ殆めて眞に永遠的普遍的のものとなるではないか。本書は斯くの如き見地に立つ著者が文化と自然とに對する觀察批判と感想とを披瀝したものである。人生を創造と見、自然を神秘と觀する著者の透徹した文化觀自然觀は必ずや眞生活の追求者に對して新緑の朝の如き清新にして力强き印象を與へるであらう。

（內容目次）：第一編人生：創造本位の人生觀：國民思想の將來：民本主義の精神：國民生活の改造と民本主義：改治の精神化・理想化：生活態度としての個人主義：自我の正視：一人の力：深く考へよ・求むる心と與ふる心：詩を求めよ：勞働を樂しむ心：愛と責任：愛と聰明：第二編藝術：文藝の價値を高めよ：自然主義より人生主義へ：批評の價値：批評家の罪惡：文藝批評の根本義：文藝批評の標準：文壇に對する批判と要求：性美の醇化：第三編自然：神秘の藏庫としての自然：雪の木崎湖：廣田紀行：關西紀行：若草は崩え初めた：夏四題：夕顏の花咲く下に野風呂哉：夏の思出：新綠：私の好きな初夏の郊外：秋：

◇奥山樹太郎氏編著◇

三版 全國兒童傑作童謠一千選

四六判帯上製美本 全壹册三百餘頁 正價金貳圓 送金十八錢

童謠の先驅!! 童謠の羅針!! 童謠の明星!! 可愛い純なーエンゼルなる兒童の表現を見よ。本書は必ずや二十世紀以後が兒童の世紀である事を物語ると共に混沌たる我が詩壇に對して遂に直ぐなる道を敎へん。御參考として諸名家の傑作十餘篇を附す——

◇黑川延平氏新著◇ 《大好評初版忽ち賣切再版出來》

好評 童謠集こんこん小雪

袖珍最上製美本 全壹册四百頁 正價壹圓五拾錢 送料十二錢

大阪毎日新聞評……本書は著者の傑作「こんこん小雪」「親笹小笹」「お正月」「虎のお家」「落書」「鬼征伐」等八拾數篇の童謠を集めて居る主として語調に重きを置きし作である。萬朝報評……本當に可憐な歌ひ易い童謠集である。

◇奈良女子高等師範學校訓導 河野伊三郎編著◇

新刊 兒童童謠選集 銀の笛

袖珍最上製美本 全壹册四百頁 正價壹圓五拾錢 送料十二錢

本書は兒童の傑作童謠を嚴選した上、著者によつて更に添削されたるものであります。それに童謠の作り方が附てあります。本書を見れば童謠になる材料の見方及其表現法がよく分ります。童謠の目的が見出されます。童謠を指導する本は此書の外に恐らくありますまい。

發兌 東京市神田表神保町七 大同館書店

◇醫學博士 羽太鋭治氏新著 《類書中の白眉》

拾版 性慾教育の研究

四六判最上製本 全壹册五百頁 正價貳圓五拾錢 送料十二錢

獨逸國に留學して生殖器學性慾學を專攻して研究甚だ力む。其の滯歐中伯林にてヴェデキンドの「春の目醒」の實演を見て青少年が性慾上の悲劇に深き印象を得たりしが歸朝後我國が此の大問題なる性慾教育の點に於て一册の見るべき書なく且つ其半面には彼等をして刻の一刻に危險と暗潮に導きつゝある現狀を見て憂慮措く能はず今や進んで其の修養を吐露して本書成る理由方法等の名著を譯し此に識聯せる智識を盡く詳說して研究上多大の便宜を內容は性慾教育家各學校教職者は何を置きても是非一度本書を必讀するの要あるべし。得べし。青年諸君は勿論一般の人生の裏面が如何に驚嘆すべき事實を作成つゝ有るかを知るを

內容目次

第一章少年期の性的智識の開發を必要とする理由：第二章性慾教育の當事者：第三章性慾教育の範圍其方法：第四章學校に於ける今日の性慾教育：第五章兩性に分かるゝ原因：第六章性的機關と性慾：第七章生殖器の構造及其異常：第八章花柳病解說：第九章兒童の性的生活及其研究に關する歷史：第十章兒童の性的現象：第十一章性的現象：第十二章性慾教育の實行：結論——《細目數百項は盡く略す》——

三版 生殖器崇拜教の話

袖珍最上製本 全壹册美本 金六拾錢 送料四錢

（上田恭輔著）本書は流行の風潮に乘せんとする際物出版ではない生殖器崇拜に就て古今の面白き事實傳說を述べ學術的組織的に研究したる本邦最初の試みで宗教的意義を說ける頗る趣味多き書である。

發兌 東京市神田區表神保町七 大同館書店

大同館發行圖書目錄

某直轄學校教授 文學士 春野道男先生 著

年頃の子女を持つる父母に代りて

性に關する講話

第五版

（四六判洋裝美本 全壹冊 百五拾頁 正價金八拾錢 送料四錢）

性に關する教育＝それは最早可否を論ずべき時代ではない。殘つた問題は其方法如何である。本書は其方法としての一の試みである。中學校高女等の上級生に讀んで貰つても爲に其品性を下落せしめ爲めに其性慾を挑發する事はないと信ずる若し世にありふれた書物と同樣なりとの非難を受くれば何時なりと絶版すべしされば父兄は子女に敎師は子弟に安心して二本を座右に呈供し給はんことを。謹んで白す。

【內容目次一班】 人の子の父と母とに……讀者への要求……肉體と精神……心身の相關に就いて……年頃と云ふこと……年頃の男女の身體……自己保存と種の保存……再び年頃の身體に就いて……女子特有の衞生につきて……年頃の男女の精神……種の保存と性慾……性慾と結婚と戀愛……接觸と不倫と不自然と……不自然なる性慾滿足……自慰の害……自慰と神經衰弱症……不倫なる性慾滿足と花柳病……軟性下疳……痳病……黴毒……遺傳……痲痺狂其他……性的惡癖の豫防と其矯正……種々なる矯正法……小說及雜誌……名種の興行物……習慣の力……習慣は如何にして生ずるか……意志の力……友人の選擇……

日蓮宗大學講師 文學士 小林一郎氏新著（日蓮の敎義）

六版 日蓮主義講話

四六版最上製美本 全壹冊五百六十頁 金貳圓五拾錢 送料十二錢

日蓮主義は現時の思想界に勃興せる新勢力なり。本書は從來の宗派を離れたる自由の見地より日蓮上人の事蹟と敎義とを平易の語を以て講述し日本國民信仰の歸着點を指示せるものにして未だ信ぜざる者は之によりて新なる生命を得べく既に信に入れるものはそこよりて現今の時勢と宗敎との關係を了解し得べし特に青年の人々に本書の熟讀をすゝむ。

日蓮宗大學講師 文學士 小林一郎氏新著（隨一の修養訓）

五版 日蓮主義日訓

袖珍最上製 全壹冊二百三十頁 金壹圓八拾錢 送料十二錢

忙しき世に立つ人は靜なる心をもつことを必要とす。忙しきんは決して修養を忘るべからず。本書は法華經と日蓮聖人遺文集とより修養上に最も適切なる金言三百六拾五を選出し之を毎日に配し之に簡單にして明快なる解釋を加へたるものなり。何人も毎朝其の業に取掛る前に本書を開かば愉快にして力强き心を以て其日の業に當るを得べし。本書は實に此の忙しき世に立つ凡ての人の師友なり。

發兌 東京市神田區表神保町七番地 大同館書店

東京帝國大學文學部助教授文學士 植松 安著 ―（類書中の白眉）―

七版 古事記新釋

四六判最上製美本 全一冊五百餘頁 正價 貳圓五拾錢 送料十八錢

著者はこの古事記を說くに當つて神代の卷に最も力を注いだ事を一言して置く樂明については單語の解說を見出し得るのみならず古事記本文の事項を探り得るから目錄の代用となる――●難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者が國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に顯はれて大和民族發展の由來を明にし國民鬱鬱の中心を說く是れ本書の特長なり。今や大戰後世界思想の急激なる變動は將に我國民思想に及ばんとす世界の日本東洋の日本我等の日本これをこの事に得よ。

東京帝國大學文學部助教授文學士 植松安新著 （四六判最上製美本全貳冊 紙數壹千參百餘頁箱入）

再版 註釋 假名の日本書紀

（上卷）金參圓五拾錢
（下卷）金參圓八拾錢
送料各廿四錢

日本書紀の一體に假名日本書紀といふものゝ存する事は從來一部の學者に知られて居たが未だ普く其存在を知る人が稀い。本書は著者が出來るだけの手を盡して調べ得た廿餘種の異本を參照して著述したものである。內容は本文を漢字交りに書下し漢字に振假名を附し假名に漢字を當て一段毎に簡明たる註解を加へ索引として辨ずべき詳細なる目錄を添ふ。我國體の淵源を知り國民性の本質を明かにせる正確なる國史を最も平易に讀み得る書である。學者政治家教育家神職を初め其他何人も是非一讀すべき書である。

發兌 東京市神田區表神保町七 大同館書店

◇文學博士波多野精一序 早稲田大學教授內ケ崎作三郎序

八版 ベルグソンと現代思潮

野村隈畔著（四六判最上製美本 五百餘頁箱入 金貳圓五拾錢 送料金十八錢）

本書はベルグソンと現代思潮との關係を說いて極めて詳密である卽ち一卷の現代思想評論と見ることが出來る。內容はベルクソンの思想を中心として現代の哲學及生活の梗概を述べたものであるだけに獨りベルクソン哲學の特色と價値とを學び得るのみならず弘く哲學的思想を解する上に於ても亦尠なからざる價値がある文章は一度之を手にすれば知らず識らずの間に讀了せしむる魔力ある文體に依つたので感興殊に深い。近來絕無の良書として江湖に一讀をすゝめる――（六合雜誌評）――

◇松山高等學校教授 三並良譯著 （菊判最上製美本全壹冊 金貳圓五拾錢 送料金十八錢）

七版 オイケン 人生の意義と價値

舊世界觀は倒たりと雖も新世界觀は未だ確立せず、思想界は紛亂し人間はその歸趣に迷はんとす。是れ實に現代の病根にして精神界一切の病源なり。オイケン博士が獨特の見地より此大問題の解決を試みたるものを本書とす。由來博士の所說は難解なりとの評ありと雖も本書の如きは決して然らず。博士も亦常に本書を最も平易の叙述と稱せり。そして博士と親交ある譯者が最新第五版によれる譯筆も亦た平明流暢なり。オイケン哲學の眞髓を知り人生問題を解かんとする者は之を繙かざるを得ず。

東京神田表神保町七 大同館發行

◇文學博士 富士川游 序文
◇佛教大學教授 梅原眞隆

文學士 朝日融溪氏新著

七版 親鸞聖人の出現と思想

四六版最上製美本全壹冊
正價壹圓八拾錢
送料十二錢

歷史は時代々々の偉人と稱へらるゝ非凡人の記錄であつた。彼等は自己を以て世を化せんとしてゐた。或は政權によつて或は軍權によつて或は金權によつてさうして互に交噬し相排擠し血みどろになつて喘いでゐる吾人はつく〴〵非凡人文化に愛想が盡きた。嫉妬・排擠而して自己宣傳もう見るも聞くも嫌だ一日も早く凡人文化の建設に急がなくてはならぬ早ければ早いだけ眞の平和は早く來るのだ而してこの凡人文化の歸結は我が親鸞聖人の思想によつて完しといつてよいのである。

◇渡部政盛氏新著◇ —(青年教育の慰安書)—

三版 異端者の悲しみと歡び

四六版最上製美本全壹冊
正價金貳圓
送料十二錢

異端者の悲しみと歡び!! 本書は此の獨學者の孤獨者異端者が卅年の思想及生活を記錄し敍傳したものである。家庭の逆境と身體的缺陷とは早くも彼れを孤獨に導いた彼は孤獨ながらに伸びた。彼は學校歷と云ふものをば有たない檢定離と異端者的不取扱の中に變則的に其の自我を實現した而も彼は今日教育思想界學術界の一大野薬として社會的に認識せらる。沈痛なる「異端者獨學者の悲しみと歡びとが青年の胸に孤獨の貴さと人間性の偉大と多大の慰安光明とを與へずにはおかないであらう。」

東京市神田區表神保町七 ■大同館發行■ 振替貯金口座東京八七貳番

◇小林一郎氏新著◇ (著者が敬仰の熱情遂に本書を成す)

四版 芭蕉翁の一生

四六判最上製美本全壹冊約六百頁
正價貳圓八拾錢
送料十八錢

其の生前に於ても死後に於ても芭蕉翁の如くに多くの崇拜者をもつて居る人は今古の詩人文士中に曾て例の無いことである此の如き人の一生は何人も之を研究して見て大なる教訓を得べきである著者は俳諧の專門家では無いが翁の作を愛誦すること既に三十年翁を識る上に於ては一種の自信をもつて居る 翻て著者は此書を現代の各階級の人に薦めて其の批判を得ることを期望して居るのである。

◇小林一郎氏新著◇ (現代青年必讀の修養書)

再版 自由の生活

四六判最上美本全壹冊約六百頁
正價貳圓五拾錢
送料十八錢

思想界の混亂は實に未曾有である。吾等は此間に處して如何に吾等の活路を開いて行くべきであるか。今は徒に樂觀するを許さぬ又徒に悲觀すべきで無い。之を過去の經過に徴し現今の情勢に照して今後の立場を確と定めなければならぬ著者は此の見地から日本の文明の過去及現在に對して自由なる批評を試みた。現代に處して意義ある生活を爲さんとする人々の一讀をすゝめる殊に青年の人々と青年指導の任にある人々は必ず精讀すべきである

發兌 東京市神田表神保町七 大同館書店

◇一條忠衛氏新著◇

再版 男女の性より觀たる社會問題

（四六版最上製美本全壹册 金壹圓八拾錢 送料金十二錢）

（時事新報批評）性？ アヽまた彼れかと早合點しては不可ない兩性の差別に立脚して近時の社會問題に對する嚴肅な合理的事實の考察であつて輕挑な分子はさらに含んでゐない今までの社會問題は經濟生活の上から主として取扱つてゐるが男女の性といふ人生の根本より研究して社會問題解決の新しい方法を見出さうとの目的で書かれたのである先づ男女の性の本質を說いて人類の生存互助を論じ女子の參政權は其の要求を俟たずに男子が兩性本位の代議制を實施する爲進んで協力すべく治警法の撤廢と共に姦通罪をば刑法より削除すべしとの大膽なる意見を述べ女子の勞働及職業に說き及ぼして最後に產兒制限に關しこれを文化の敵である正義の賊であると叫び新マルサス主義の避姙論に及び著者が高い人格者としての道德觀が現はれて居る附錄の古典に現はれたる男女道德觀は原典の本文を引いて直接に味讀せしむる方法で整じの解說よりは遙かに優れた試みである。

◇一條忠衛氏新著◇（大好評を博して增刷出來）—

新刊 人格主義の社會觀

四六版最上製美本全一册箱入 正價金貳圓 送料十二錢

（日本及日本人批評）人格主義を根抵として、社會改造・道德法律參政權・勞働倫理・東洋道德政策・生命の保護・個人主義・家族制度の國際道德・孟子の倫理說・等に就き、縱橫に論述して居る新人の著として確に一讀の價ひがある。時局に對する道德批判としても頗る意義が深い。眞劍味の溢した書である。

東京市神田區表神保町七 ■大同館發行■ 振替貯金口座 東京八七貳番

◇東京帝國大學文學部助教授 植松安氏著（增刷出來）

新刊 記紀の歌の新釋

古典の國民化これ私しの大に望む所であつて彙に記紀の歌のみに就いて書いて見た。古事記は文學日本紀は歷史と云ふ著者の見方である本書はもと和歌の講義錄に執筆したものであるが完結と共に修補したものであるもとより新論と云ふでは無いが現今の一般が參考として讀むには便宜であると思ふ。（著者）

四六判最上製美本全壹册參百頁 正價金貳圓 送料十二錢

◇荒井庸夫氏新著（人間としての將門研究）

好評 平將門論

四六判最上製美本全壹册參百餘頁 正價金貳圓 送料十二錢

將門は世間から或は逆賊とよばれ或は鄕土の英雄と崇められ或ば鬼の子か人の子かなどゝ稱せられてゐる著者は其說の分れてゐるのを遺憾として將門につき徹底的研究を試みたせのが本書である 卽ち坂東といふ天下の大舞臺により承平天慶といふ動亂時代に活動して歷史的人物として沒することの出來ない史的人間たる將門を三編に分ち詳述せるもの尙將門と關係ある幸運兒田原藤太秀鄕と坂東武者忠常とについて論じ將門を補足せる近來の面白き趣味ある書である（報知新聞評）

發兌 東京市神田區表神保町七番地 大同館書店

◇市川虚山・小關愛村氏共著《教育者の修養書》

三版

ペスタロッチ全集

本書は近代教育思潮の權威にして實際教育の創造者たる世界的大教育家ペスタロッチが變遷極り無き數奇的傳記を熱烈の筆を以て縱横に述べ其の代表的名著の梗概或は全文を平明的確に叙述紹介せり。かの難解晦澁なる飜譯書とは全然其の選を異にし快文才筆流るゝが如く讀者をして卷を措く能はざらしむ。苟も任教育にあるの士にして眞摯なる生活に生きんとする人は速に本書を手にして自己の心靈に此の偉人の靈火を點せられよ。

四六判最上製本
全壹册五百餘頁
正價金貳圓
送料十二錢

◇原田實氏新著◇《人間の力と光とを光輝せねばならぬ》

四版

人間への教育

人間の力と光とをもつと學校や家庭や社會に活動せしめねばならぬ。私は切に人間の心を思ひ人間の姿を想はざるを得ないこの思慕と志向とが本書を書かせたと云へる私は私達の家庭と學校と社會とは今や人間への教育を深く〳〵考へて見なければならぬ一大危局に立つて居ると云ふ事をつく〳〵思ふものである。（著者）

四六判最上製美本
全壹册五百餘頁
金貳圓五拾錢
送料十二錢

發兌 東京市神田區表神保町七番地 大同館書店

◇奈良女子高等師範學校訓導 櫻井祐男氏新著

忽六版

生を教育に求めて

—《四六判最上製美本 金貳圓八拾錢 送料十二錢》—

著者曰く私はよほどの感激と敬虔をもつてこの書を私の同伴の士たる天下無窮の青年教育家諸君に捧げたいと思ふ。主人公欽一は人生の寂寥さに悶えながらも尙ほ己が生の榮誉と優越に深き固き信條と信念を有ち教育を以て己が人生——生活と思料し其生活的顯現の爲に日夜の赤誠を致さうとしてゐる。而かもそこに總てを捨てゝ總てを獲ようとする矛盾撞著のたゝ中に仁王立ちに奮激してゐる彼が性格の强さ弱さが思はれるであらう。その强き弱きから來る彼が生の煩惱と葛藤は解決のまゝに未解決は未解決のまゝに必ずや讀者諸君の人生の上に何等かの示唆と感激を與すであらう——ことを疑はない。

内容目次一瞥 (一)唯一途に吾れを愛すが故に……(二)紅き血と高き鼓動と……(三)「教育即生活」と信念するまで……(四)天の慈光地の靈潤……(五)嫌を有つ母鶏を慕ひて……(六)子供よ、總ての絆を解いて平明に……(七)哀れ子供の批……(八)蒲合ふ如き慈雨……(九)餞の出動を厭ひて……(一〇)疲れても尙ほ輝かしき途足……(一一)生れざるものゝ悲哀……(一二)梧桐の蔭に立ちて……(一三)總てがない生活——美……(一四)風かに柔和に自然に……(一五)「先生太鼓の音が聞えます」……(一六)唯悲壯と流る——尺八の音……(一七)唯一日を休ふ……(一八)啼かざる鳥……(一九)總ての制縛に堪へて……(二〇)奈良に來て唯一の財寶……(二一)嫌いものは嫌しい。その生は震へてゐる……(二二)同志よ來れ語らうに……(二三)同職の士よ何を見に。

東京京神田
大同館藏版

□東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授 文學博士 宇野哲人先生新著□

四版

四書講義 大學

大學は儒教の目的を最も善く組織的に叙述せるものなりとは著者の創唱する所、此書は如上の見解により て平易明晰に講述せるものにして冠するに大學要旨を以てし附するに索引及之と密接の關係ある幾多有益の研究を以てす。苟くも儒教の何物たるかを知らんと欲せば必ず此書を繙いて著者の圓熟せる講話を聞かざるべからず。

菊判最上製美本
全壹冊參百五拾頁
正價金貳圓
郵稅金十八錢

□東京帝國大學文科助教授
東京高等師範學校教授 文學博士 宇野哲人先生新著□

五版

四書講義 中庸

儒教の目的は大學に備はり、儒教の根本義は中庸に明かである。かくて學庸の二書は經となり綜となり。互に相待つて儒教の眞相を傳ふ。著者は如上の見解を以て先に大學講義を著はし今亦中庸講義を著す。大學に由て既に儒教の目的を明かにせる大方の士は請ふ更に中庸に就いて儒教哲理の餘蘊を了せよ。尙附錄教篇は皆直接間接に中庸の意義を明かにするものである。

菊判最上製美本
全壹冊壹百八拾頁
正價貳圓五拾錢
郵稅十八錢

東京 神田 大同館藏版

文驗受驗者必備の要書

東京帝國大學文學部教授
東京高等師範學校教授 文學博士 宇野哲人先生新著《文檢受驗者必讀書》

貳拾版

支那哲學史講話

本書は上古より清末に至る迄の支那思想の大要を極めて平易簡單に叙述して最もよく要領を盡くせるものなり。特に嵩朝に於ける學術思想の變遷が如何に暗々裏に革命を惹起するに至りしか、支那の新人の思想は如何なる傾向を帶ぶるかは著者の最も留意せる所にして從來世に行はれたる支那哲學史の缺陷は本書に依て補足せられて亦遺憾なし。本書は又附錄として一々原文を揭げて直ちに堂奧を窺ふの便に供し亦著者の議論の根據あるを知らしむ。要するに本書は初學者にも專攻家にも座右に缺くべからざる絕好の新著なり。

菊判最上製美本
全壹冊五百頁
正價貳圓五拾錢
送料十八錢

六版

支那哲學の研究

支那哲學史講話の姉妹篇

本書は上は三代より下は近世に至り或は一代の思想を概論し或は特殊の問題を細叙し支那哲學に關する博士獨特の研究は殆んど此書に網羅せらる。

講話を讀んで略々大意に通ずる者は更に此書に就て斯學の堂奧に參せよ。

（內容の一班）：支那哲學概觀：先秦思想概觀：孔子の三大事業：教育家としての孔夫子：曾子の學說：孟子の教育說：孟子の自由平等觀：漢代思想の傾向：竹林の七賢に就て：文中子の哲學：支那文化の考察と其特質：孟子の君臣論：洪範を論ず：其他．

四六判最上製本
全壹冊五百頁
正價金貳圓
送料十二錢

發兌 東京市神田區表神保町七 大同館書店

◇渡部政盛氏新著《隨一の民衆哲學辭書提供》

三版

最新哲學辭典

菊判最上製美本
全壹册背皮箱入
金五圓八拾錢
送料廿七錢

《本書の特色》(一)現代文化民衆の哲學慾を充すを目的として編纂したる事(二)文章平易記述繁簡宜しきを得て一讀直ちに其要點を捕捉し得る事(三)內容は哲學概論・東洋西洋哲學史・倫理學・東洋西洋倫理學史・論理學・美學・宗教・社會學・經濟哲學は勿論・生物學・心理學・哲學藝術上の最近思潮特に現代哲學の記述に萬遺憾なからん事を期す(四)所謂廣義の哲學以外現代の文藝術社會問題經濟問題政治問題婦人問題等にも亘りたる事(五)學術及文檢受驗者の便を計り史上の問題を詳述したる事(六)文化生活への奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事等である要するに本書は現代人に缺く可らざる哲學の鳥瞰圖ともいふべき書也。

◇東京豐島師範學校教諭　栗原寅治郎著《好評激甚增版出來》

五版

改造

世界地理精說

菊判最上製美本
全壹册七百頁
金五圓八拾錢
送料廿七錢

本書內容は材料選擇に當りて特に我國との關係的方面を重視し世界の大勢に通ずると共に直ちに彼我列下の形勢を理解せしめ今後の國民として國家的生活を營むに十分なる資料を自然人文の兩方面より精査して集むるに一なりと大なる自信を以て推奬する所以なり。

發兌　東京市神田區表神保町七番地　大同館書店

■津田光造氏新著■

二宮尊德の人格と現代

■四六判最上製
■美本四百頁　正價金貳圓　送料十二錢

忽三版

本書は『二宮尊德の民主生活』の姉妹編として書いたものである前のは翁の哲學若くは思想生活を主として紹介したのであるが今度のはあの哲學を生むに至つた翁の人格と生活との評價を試みそれの現代との關係を論究しようとしたものである。過去の偉人に對して代名詞に「翁」とか「先生」とか云ふ敬稱を用ふる事は吾々の禮儀であり尊崇の表示であるにも拘らず、本書は必ずしもそれに據らず、時に之を用ひ、寧ろ「金次郎」とか「彼」とか云ふ平常の樣式に出づる事が多かつたのは本書が單なる傳記でなく評傳であるからである。斯かる意味から私は今度の試みに於て一方に於て益々彼の聖人味を高調する事を努めたと同時に又他方に於て出來る丈彼の人間味を發揮する事を忘らない事にした。卷末に載せた「青年教師の懷疑」は一青年教師の現代義の敎育と生活とに對する止み難き反抗の聲であり其感想の手記である彼が二宮尊德の人格と生活とに接して如何なる感化を受けしかは偏に讀者の批判に待つ。

東京神田表神保町七
大同館發行

津田光造著■二宮尊德の民主生活　全　金九十錢　送料八錢

大同館發行圖書目錄

教育學術會編纂

三版

文檢教育大意國民道德要領問題解答

四六判洋裝美本 全壹冊約三百頁 金壹圓七拾錢 送料金十二錢

本書は文檢「教育大意」「國民道德要領」受驗者の爲めに第一回より最新大正八年度までの全問題に對して解答を試みたものである。故に讀者は本書に依て答案作製の次第と程度とを知り更にこれを記臨することに依て同一問題の出でたる場合理想的なる解答をなすことが出來る附錄二篇は「教育大意」受驗法と「國民道德要領」受驗法で同時に參考書・研究法・答案の心得等をも收めてをる。要するに兩科受驗者の最良相談相手である。

文檢各科受驗者必讀書發賣

教育學術會編纂

四六判最上級美本 全壹冊 正價金貳圓 送料十二錢

第七版 文檢受驗用 教育勅語戊申詔書解義

苟も本書を讀みし者にて文檢國民道德要領受驗中の勅語及實踐道德の問題に對して一も解答し得ざることなし。文體亦頗る平易如何なる人も文を解するに苦しむが如きことなし。受驗者諸君の必讀をすゝむ。

◇京都帝國大學文學部教授文學博士 三浦周行 序
◇京都帝國大學文學部助教授文學士 本庄榮次郎 文 坂上信夫新著

新刊

土地爭奪史論

四六版最上製美本 全壹冊 正價金貳圓 送料十八錢

土を負うて土に反り行く者の土の上に畫ける生活の歷史である。國史三千年の推移を辿つて吾等の祖先が如何なる生活の姿を其上に遺したであらうか。土地制度の歷史を說く間に、人間性の歸趨を靜觀して其姿を顯しつゝ、「自分の腕に火をつけてその燃ゆる腕を捧げて叫ぶに非れば吾世の闇は霽れないであらう」といふ結論に導いて行く。深い思索と豐かな情操と燃ゆるが如き火の文字を此一卷の處女作に收めて著者は之を江湖の有識者に捧げ其示教を俟つといふのである。

◇新井白石氏遺著◇ —(國史研究者唯一の參考書)—

五版 讀史餘論

四六版最上製美本 全壹冊 正價金貳圓 送料十八錢

白石の讀史餘論の價値は今更論ずるの要なし本書は主として白石の外孫藤清盈の謄寫本に據り其他諸種の異本を參照して增補せるものなれば從來世に現れたるものゝ中で最も信賴するに足るべし。そして原本の評語註語のほか新に校訂者が補語を附し以て異說を擧げ且つ註釋を施して研究者の便を計れる勞は多とすべし且つ一々讀み假名を附し卷末に索引を添へたり。——(內外教育評論評)——

東京市神田區淡路町七 大同館發行 發替貯金口座 東京八七貳番

小學校に是非一本を備ふ可き良書

▲教授用と檢定受驗用とを兼備せる隨一の國史參考書▼

國學院大學講師 文學士 岡部精一氏 高橋與惣氏共著

五版 文部省檢定 試驗問題對照 大日本歷史

●菊判クロース製最上美本 紙數九百五拾頁 全壹冊 金六圓八拾錢 郵稅 十六錢

本書は各種○校の國史科教授の參考に供し兼て各種の受驗準備に資せんが爲めに編纂せるものにして教授參考に供する方法としては現行文部省の中等學校及教小學校の授綱目を基礎とし之れを適宜配合して綱章を分ち國史の本幹を形成せる事實を精細に通說し又古今史學家の發表せし新說の穩健なるものは努めて之れを採錄せり。試驗準備に資する方法としては第一回より第廿六回に至る文檢試驗問題を發題者の要求を推究探尋して一々精密に解釋し盡く各章末に添附せり。加ふるに編者多年の經驗と研究とを以て殆の遺漏なきを期したれば諸學校に取りては繁簡適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たるべく檢定受驗者殊に小學校教員諸氏に取りては教授用と受驗準備用とを兼備せる斯學隨一の羅針盤たるべし。

發行所 東京市神田區表神保町六番地 振替貯金口座東京八七貳番 大同館書店

東京高等師範學校教授文學士 中村久四郎先生 高橋與惣先生 新著

六版

文部省檢定 受驗用 東洋通史

菊判最上製美本全一冊紙數九百餘頁正價金四圓八拾錢郵稅二十錢

本書の組織は現今中等學校の教授綱目を適宜配合して四編六拾五章に分ち著者多年の實地的經驗を基礎とせる國史實を盡く有機的連絡の下に最も平易正確懇切に通說せり そして從來の東洋史の最大缺點たる記述の無味乾燥及び繁雜に過ぎずば簡易に失せる缺點・地名人名の難讀・官職の難解等を補ひし外 古今東西史學者の技藝せる學說の穩健なるものは努めて之を採錄し一々出所出典を明示して研究者の便に資せり・又文部省檢定試驗問題の餘蘊盡く最近に至る迄の分を盡く明瞭に解答し之を本文の間に分載し以て受驗者に一大秘庫を提供せり・要するに本書は文檢受驗用の名を冠すと雖も一切の史實を通說せるは 勿論古來日支兩國の關係殊に最近世東洋外交上の事件人物を詳說したれば啻に中等教員小學教授參考及文檢受驗者の一大秘庫たるのみならず史學研究者世の識者も亦座右に備へて大に得益なかるべからず・

東京神田 大同館發行

◈渡部政盛氏新著◈菊判最上製美本箱入紙數七百餘頁全壹冊　金五圓八拾錢　送料金廿四錢

三版

教育學概論

集說批判

本書六大特色

▲教育概念の批判的本質的闡明
▲教育學概念の科學的哲學的論明
▲新教育學體系の模範的確立
▲教育基礎論なる新研究項目の特設
▲教授訓練二方便說の徹底的主張
▲最近教育思潮の批判的攝取

本書內容は(一)歷史批判(二)事實批判(三)現代思潮批判(四)目的々本質的批判に立脚して最眞最美の教育原理を闡明し實際教育に對して最も根本的なる最も嶄新なる規範を提供したのである。教育一般を研究の對象として科學に立脚しながら哲學を忘れず、教育の意義・教育學の概念を諸方面から縱橫に考察論明し特に理論的教育學の新體系を確立し教育原理の基礎論として詳細なる被教育者論及社會人生論を試み目的概念としての文化的人格の形式內容を精說し教授訓練の二方便說に隨て方法論を二分的に說述し最後に獨自の見地から教育動力論(教育者論)を試み機關論をなした。系統的てふ形容の意味は本書に於てのみ味ふことが出來やうかと思ふ。本書は眞に集說的にして批判的である。教育學研究者文檢受驗者學校圖書館の必備及清鑑を俟つ所以なり。【數年六個年で定成せる苦心の大著】

東京神田表神保町七
大同館發行

■稻毛詛風先生新著■（好評嘖々）

青年教師の歩める道

第六版

▲四六判上製美本全壹冊　正價金貳圓　稅郵金十二錢▼

「教育界の謀反者」として斷然教職を放棄し刻苦勵精以て今日に到れる著者が教育者の生活と教育界の現狀とを見て感奮措く能ず遂に六箇年に亘れる教師生活の全部を披瀝したるものは本書也。多感にして俊鋭なる青年田舍教師が暗憺たる家庭と荒凉たる社會との間にあつて如何に自己の眞實のために力爭苦鬪懊惱したるか深刻にして赤裸々たる告白的叙述が如何に從來隱されたる人生の一斷面を闡明したるか有爲なる教育者は勿論苟くも眞實なる生活を求むるものは乞ふ來りて本書を展開せる嚴肅悲痛なる人生の事實を見よ。

東京神田表神保町七
■大同館發行■
振替口座東京八七二

◇瀧本二郎氏新著◇ —《國家及人類の爲に警醒を促す》—

三版 社會勞働問題と産兒制限論

新マルサス主義は創唱せられたれども未だ完全に批判せる書は出ず本書は著者が專攻の社會勞働問題のこれが根本的解決は産兒制限による外なしとの見地より歐米に親しく留學して英・米・佛・獨・露・等諸國の勞働狀態を精査してその所信の正否を檢討研究力說せるものなり。內容は大家族制の惡弊と産兒制限……社會政策解決と産兒制限……人類解放實現と産兒制限……人道と産兒制限……基督敎と産兒制限……民族自滅論と産兒制限……世界平和實現と産兒制限……英米に於けるマルサス主義……等熱烈なる著者の筆は自覺ある現代青年者有識者には必すや何らかの暗示と啓發とを與ふるであらう。

四六判最上製 美本全壹册 正壹圓八十錢 價 送料十二錢

◇江幡龜壽氏新著◇ —《生物界の研究は近來白熱的に盛なり》—

三版 增訂 教育的生物學

生物學は地球生物群の成立發育の因由玆に其法則を明かにせんとする學である此の學に依らずんば人間の眞相人生の歸趣を知るを得ず本書は著者が專攻の生物學を教育的見地より平易に講述せるものにして實に現代必讀の書なり。

(目次の一班)……生存慾の具體的表現……原始生活より智的生活へ……生物學的國家觀……死と永生……遺傳と人生……生の鬪爭と人口論……生命の繼……人類の運命觀……生物學上より觀たる人間作成の力……人間の發育と教育……青年女性の研究……婦人改造論と生物學的批判……社會問題と生物學的意義

四六判最上製 美本全壹册 正金貳圓 價 送料十二錢

東京市神田區神保町七 表 大同館發行 振替貯金口座 東京八七貳番

◇永野芳夫氏新著—《世界唯一の研究書です》—

最新刊 デューウィ哲學說研究

《永野芳夫著 ●デューウィ教育學說の研究 正價金貳圓 送料十八錢 姉妹篇》

系統や組織を立てないデューウイ哲學の全貌を知ることは至難である從つて彼の哲學の系統的研究は著者の本國アメリカにさへない其の意味でこの書は今の所世界唯一の組織的系統的研究書であるデューウイの教育說は地球の全部を包まうとしてゐる それだのに其教育說の基礎なる哲學說を本當に知り得てる人は少ない本書は概論である故にこれに依つてデューウイ哲學全般の骨子も知られるデューウイ思想を眞に知らうとする者は必ず讀れたい。

四六判最上製 美本全壹册 金貳圓 送料十八錢

◇東京帝國大學敎授 島地大等氏閲 文學士 朝日融溪氏新著

最新刊 感想 一筋の白き道へ

《親鸞聖人の出現と思想 【五版】 金壹圓八十錢 送料十八錢 姉妹篇》——

親鸞新解釋——讀書界の傾向は今や宗敎的方面へと集中してゐる この書もその一つである人間の明るき生活輝ける生活といつた樣なものを中心として 日常生活の迷ひを除き自暴自棄の危難を避け專念に與へられたる一筋の白き道へ進む事を說いたもので宗敎思想を說いたものとしては例のなづみ難い佛臭がなく青年の讀みものとしては喜び迎ふべきものである。

四六判最上製 美本全壹册 金壹圓五拾錢 送料十五錢

東京神田 大同館發行

□三浦修吾先生新著□

教育者の思想と生活

四六判最上製美本全壹冊箱入
正價金貳圓　郵稅十二錢

著者は教育者として十幾年の苦しい生涯を送つて來た。肉體にも智識にも多くの缺點を有つてゐた著者は導かれる方へ進まんが爲め眞摯に考へ純粹に感じ强く實行せんとして幾多の障碍に出會つた。躓き乍ら血を流し乍ら猶光明に向て進まんとして細いかすれた聲を出して叫び續けて來た。

暗い惱み！、教育者としての慰めと力とを得んとする士は讀め

其聲が此書と爲つたのである。思想の上に實驗の上に家庭生活の上にどれ丈著者が苦惱して來たか、其事が何等かの暗示を有つものであり得たら著者の幸は之に過ぎない。

目次一班

一教育者の思想……思想と生活……自立論……教育と宗教……人と事業……人と職業……徹底と眞實……教育者の資格……教育者としての努力……教ふる人學ぶ人……天職……精神生活と云ふこと……生きる爲の思想……勞働と智識……師弟の情誼……眞實の心……自發的精神……二教育者の體驗……好き嫌ひ……最も警戒を要する時……若葉の榮ゆる頃……俯仰天地……獨居……或る若き教師……汝の運命を喜べ……三學校教師と生活……教育者と學校教師學校教師と經濟生活……

終